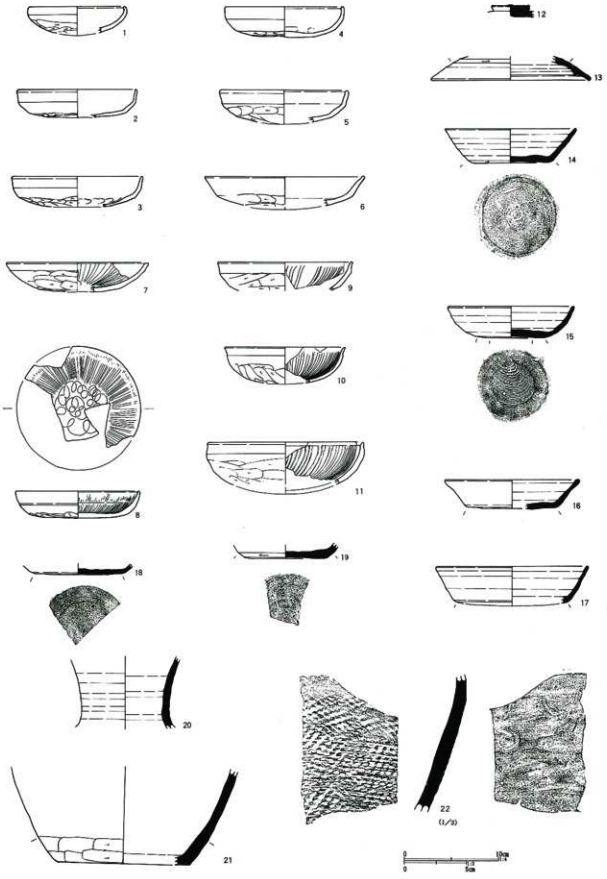
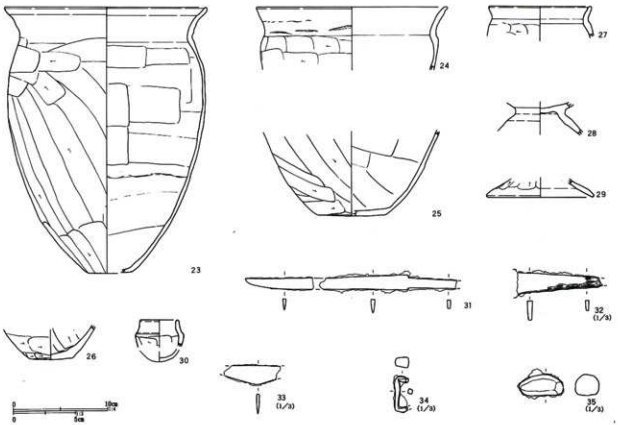
第76図　A区第47号住居跡出土遺物(1)



第77図　A区第47号住居跡出土遺物(2)



床面から伏せた状態で出土した。また、カマド内火床面からは、23の甕が倒立状態で検出された。その脇から24の甕が検出された。その他、南西コーナー部床面には編物石がまとまって残されていた。

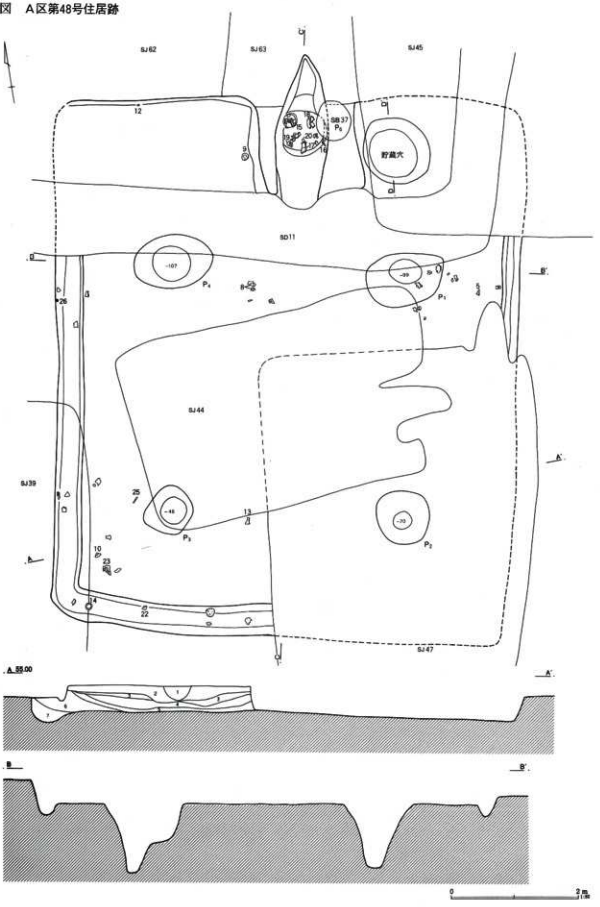
1～5は土師器坏。1は混入、他は弱い丸底で、扁平な器形が共通する。7～11は暗文坏。8を除いて混入か。8は平底暗文坏で、内面に放射十螺旋暗文が施されている。12・13は須恵器蓋で、混入の可能性が高い。14～19は須恵器坏。14は末野産、15・16は南比企産で、両窯の製品が共伴する。17・18は混入か。19は産地不明。底部は厚く、体部下端まで回転ヘラケズリされる。群馬産か。20は緻密な胎土で、硬質に焼き上がる。産地は不明だが湖西産または秋間産の可能性がある。23はカマド内から出土したほぼ完形の甕。やや長胴気味の器形である。30はミニチュア土器でカマド内から出土した。31～33は刀子。35は鉄塊状鉄製品である。須恵器は142片出土し、坏が76点（末野産63・南比企産12・不明1）、椀が1点（南比企）、高台付盤が1点（末野）、蓋が35点（末野34・南比企1）、横瓶1点（末野）、壺瓶類2点（末野1・不明1）甕が26点（末野）となる。時期は熊野Ⅲ期古相～新相と考えられる。

A区第48号住居跡（第78・79図）

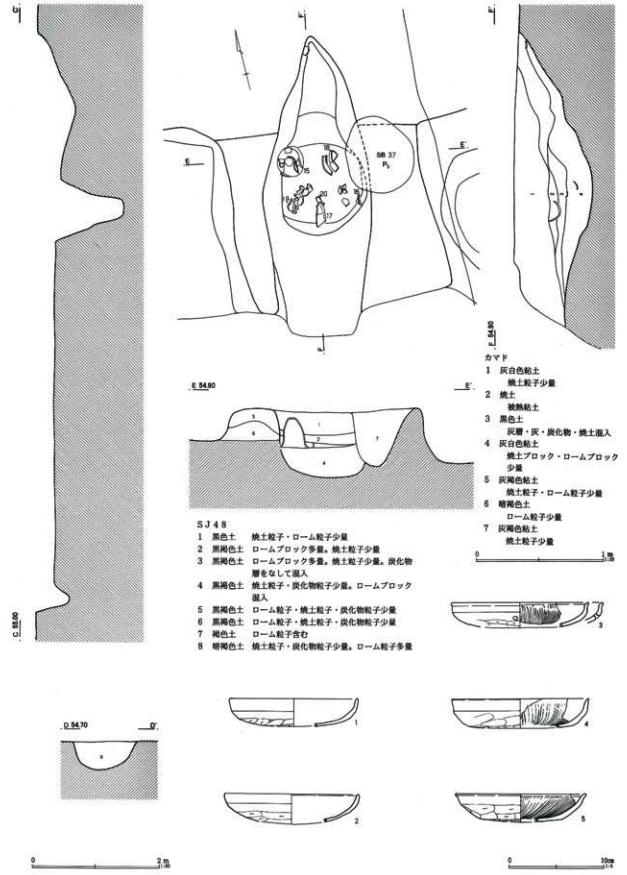
第48号住居跡は46－10・11グリッドに位置する。多数の遺構と重複し、新旧関係は第49・62・63号住居跡を切り、第39・44・45・47・50号住居跡、及び第5・11号溝跡に切られていた。第37号掘立柱建物跡との関係は不明確であるが、カマド断面観察から本住居跡の方が古いことが判明した。平面形は方形と考えられる。A区最大の大型住居跡で、規模は長軸長8.45m、短軸長7.40m、深さ0.40mである。主軸方位はN－8°－Eを指す。

床面は概ね平坦で堅く踏み固められていた。埋土は黒褐色土を基調とし、第2～4層にはロームブロックが多量に含まれ、第3層中には炭化物が縞状に堆積するなど、人為的に埋め戻された可能性がある。

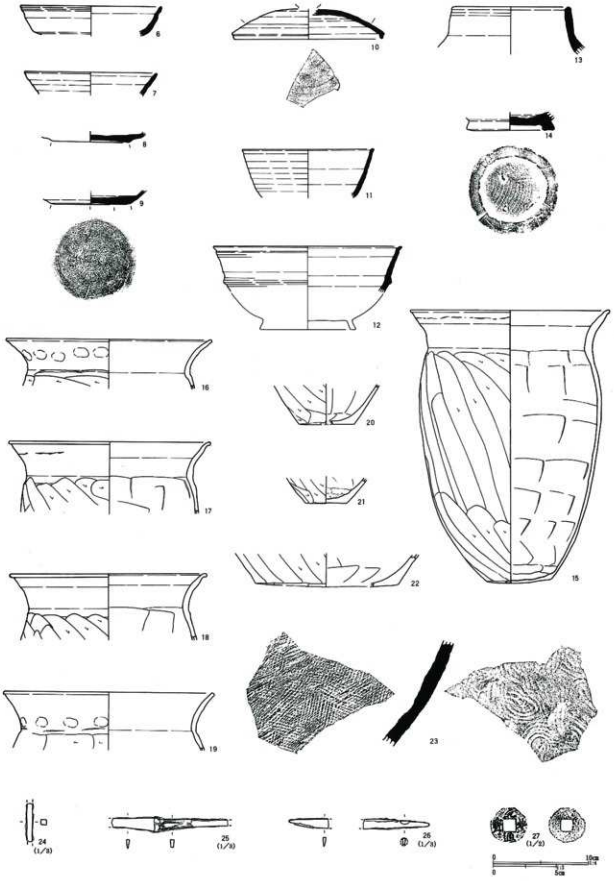
第78図　A区第48号住居跡



第79図　A区第48号住居跡カマド・出土遺物(1)



第80図　A区第48号住居跡出土遺物(2)



第36表　A区第48号住居跡出土遺物観察表（第79･80図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	(13.4)	2.9		AB	C	橙褐色	20%	Pit4掘り方。風化著しい
2	土師坏	(14.0)	2.9		AB	B	褐色	20%	覆土
3	土師暗文坏	(14.4)	2.5		AB	A	明褐色	10%	覆土。幅広の工具による放射暗文
4	土師暗文坏	(14.4)	3.0	10.9	AD	B	褐色	15%	貯蔵穴。やや雑な放射暗文。体部ナデか
5	土師暗文坏	(13.5)	2.9	8.8	AB	A	淡褐色	20%	№36。覆土下層。内面放射暗文
6	須恵坏	(14.8)	3.0		CF	A	灰色	20%	覆土。末野産
7	須恵坏	14.0	2.5		B	A	灰白色	10%	Pit2掘り方。湖西産か。胎土精選
8	須恵坏		1.1	8.2	BD	C	黄灰褐色	75%	№23。床面。末野産。底部3ａ手法
9	須恵坏		1.5	8.4	BC片	B	灰色	95%	№1。覆土上層。末野産。底部B3ａ手法。火襷痕あり
10	須恵蓋	(15.6)	3.2		C	A	黄褐色	15%	№10。覆土中層。産地不明。内面ヘラ記号
11	須恵高台椀	(13.6)	5.1		片	A	暗青灰色	15%	カマド覆土。末野産。混入
12	須恵稜椀	(19.8)	4.8		BC片	B	灰色	5%	SJ-48，45-10Gⅲ2。覆土中層。末野産
13	須恵短頸壺	(12.0)	4.9		C片	A	青灰色	10%	№2。覆土下層。末野産
14	須恵長頸瓶		1.9	9.2	BC	A	紫灰色	95%	№6。覆土上層。産地不明。底部糸切り
15	土師甕	20.7	28.7	6.7	AB	B	明褐色	95%	カマド内№23。胴部ケズリ前に指ナデ調整(斜方向)
16	土師甕	21.4	5.2		AB	B	黄褐色	65%	カマド内№9
17	土師甕	(21.0)	7.5		ABC	B	明褐色	35%	カマド内№10
18	土師甕	(20.4)	7.0		AB	A	褐色	60%	カマド内№2＋№4他
19	土師甕	(22.0)	6.0		AB	B	明褐色	20%	カマド内№13
20	土師甕		4.2	(5.8)	AB	A	明褐色	40%	カマド内№12
21	土師甕		2.7	4.4	ABD	A	明褐色	75%	覆土
22	土師壺		3.5	(15.0)	AB	B	褐色	15%	№5。覆土下層
23	須恵甕				C片	A	黄灰色		№9。覆土上層。末野産
24	不明鉄製品	Pit2掘り方。残長2.9cm。棒状							
25	刀子	№38。床面。残長9.0cm。鞘一部残る							
26	刀子	№40。壁際覆土中層。残長3.1cm･5.2cm。切先部及び柄部片。木質残る							
27	古銭	覆土。元豊通寶（行書）。北宋銭。1078年初鋳							

カマドは北壁の中央に設置される。燃焼部はほぼ壁内に納まり、煙道部は壁外に緩やかに立ち上がる。燃焼部側壁上部は強く被熱していた。袖は白色粘土を積み上げて構築されているが、右袖部は第37号掘立柱建物跡柱穴によって一部破壊されていた。燃焼部火床面にはほぼ完形の甕（第80図15）が伏せた状態で遺存していた。

ピットは4本検出された。いずれも主柱穴と考えられる。埋土中には炭化物層（第3層相当）が堆積しており、住居廃絶時には柱は抜き取られたものと考えられる。

貯蔵穴はカマド右脇から検出された。円形プランで直径72cm、深さ42cm。壁溝は西壁と南壁、東壁の一部で検出された。深さ15cm前後と比較的深い。

出土遺物は土師器坏・暗文坏・甕・壺、須恵器坏・蓋・稜椀・高台椀・長頸瓶・短頸壺・甕、鉄製品、古銭がある（第79･80図）。第79図1・2は土師器坏。底部は弱い丸底で、扁平な器形である。3～5は平底または平底風の暗文坏で、内面に放射暗文が施されている。3は体部側面に小孔が穿たれている。5は見込部の放射暗文がナデ消されている。螺旋暗文は施されない。6～9は須恵器坏。7は胎土から湖西産と推定される。他は末野産。6は推定口径14.8cm。扁平な平底坏となろう。8・9は底部全面回転ヘラケズリ調整される。9はヘラが達しない部分に糸切り痕がみえる。10は蓋。胎土は緻密で硬質に焼き上がっている。内面に「×」のヘラ記号が刻まれている。産地は不明であるが、東海産あるいは東金子産にも似る。11は高台椀で混入。12は佐波理模倣の稜椀。口唇部に内傾する面をもち、体部中位に凸帯を設けている。重複する第62号住居跡に同一個体と思われる破片がある。末野産。13は短頸壺。14は長頸瓶底部で、糸切り痕が残る。焼きは良く、東金子産か。出土位置から、本来第39号住居跡に伴う遺

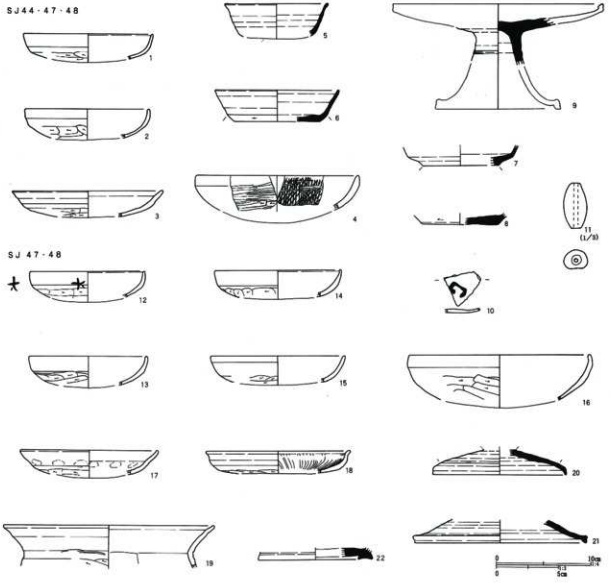
物と考えられる。15はほぼ完形の土師器甕。胴部はまだ長胴気味で、ナナメのヘラケズリが施される。また、ヘラケズリ以前に右上がりの指ナデを行った痕跡が確認できる。16～18は15と同類の甕、19は胴部上位は横方向のヘラケズリが施されている。25・26は刀子。25には鏑が残る。26は木柄が残る。27は元豊通寶（北宋銭、1078年初鋳）。混入品。

須恵器は69片出土した。内訳は坏が47点（末野産44・南比企産２・湖西産１）、稜椀１点（末野）、高台椀４点（末野）、蓋13点（末野12・不明１）、壺瓶類３点（末野１・湖西１・不明１）甕１点（末野）となる。時期は熊野Ⅲ期古相と考えられ、重複する第62号住居跡と同一段階である。

Ａ区第44・47・48号住居跡出土遺物

第81図には第44・47・48号住居跡確認段階で出土した遺物を掲載した。帰属関係は不明であるが、大半が第47号住居跡または第48号住居跡に属するものと考えられる。第81図７は第48号住居跡に帰属することが判明した。６は群馬産の坏と思われる。底部と体部下端が回転ヘラケズリされる。８も群馬産（秋間産か）と思われる。底部は非常に厚く、底部と体部下端が回転ヘラケズリ調整される。９は高盤で、末野産。脚部に沈線状の段が付く。10は土師器坏で、内面に墨書が記されている。字は不明確だが、「内」

第81図　Ａ区第44・47・48号住居跡出土遺物



第37表　A区第44・47・48号住居跡出土遺物観察表（第81図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	(13.6)	2.6		AB	B	淡褐色	10%	SJ44・47・48覆土
2	土師坏	(13.0)	3.0		A	A	褐色	10%	SJ44・47・48覆土
3	土師皿	(15.8)	2.7		AB	A	明褐色	10%	SJ44・47・48覆土
4	土師暗文坏	(17.0)	3.6		B	A	赤褐色	5%	SJ44・47・48覆土。外面ミガキ・内面斜格子暗文
5	須恵坏	(10.8)	3.4		A片	C	黄灰色	15%	SJ44・47・48覆土。末野産
6	須恵坏	(13.0)	3.3	(9.0)	CF	B	灰白色	15%	SJ44・47・48覆土。群馬産
7	須恵坏		2.1	(8.0)	BD	C	灰褐色	15%	SJ44・47・48覆土。末野産。SJ48－8と同一個体
8	須恵坏		1.2	(8.0)	B	A	灰白色	25%	SJ44・47・48覆土。秋間産か。素地土細かい
9	須恵高盤		4.9		B片	B	灰色	40%	SJ44・47・48覆土。末野産。脚部に段がつく
10	土師坏				AC	B	褐色		SJ44・47・48覆土。内面に墨書「内」か
11	土錘	SJ44・47・48覆土。長さ3.6cm。最大径1.9cm。孔径0.35cm。重さ9.10g。焼成A。茶褐色。残存100%							
12	土師坏	12.0	2.7		AB	B	褐色	20%	SJ47・48覆土。外側面墨書「大」か
13	土師坏	12.3	3.0		AB	A	褐色	25%	SJ47・48覆土
14	土師坏	13.2	2.8		AB	A	褐色	25%	SJ47・48覆土
15	土師坏	14.0	2.8		AB	A	褐色	20%	SJ47・48覆土
16	土師坏	19.0	4.7		AB	B	橙褐色	10%	SJ47・48覆土
17	土師皿	(14.4)	2.5		AB	B	橙褐色	25%	SJ47・48覆土
18	土師暗文皿	(15.0)	2.3	(12.7)	AB	A	明褐色	25%	SJ47・48覆土
19	土師甕	(22.0)	4.5		AB	A	明褐色	10%	SJ47・48覆土
20	須恵蓋	(14.0)	2.6		BF	A	緑灰色	20%	SJ47・48覆土。湖西産
21	須恵蓋	(18.0)	2.4		B片	C	淡灰色	10%	SJ47・48覆土。末野産
22	須恵長頸瓶		1.2	(12.0)	B	C	灰白色	15%	SJ47・48覆土。群馬産か。焼成やや甘い

かもしれない。12の土師器坏外面には横向きに小さく「大」の墨書が記されていた。20は須恵器蓋で、胎土や器形から湖西産と推定される。22は群馬産か。

A区第49号住居跡（第82図）

第49号住居跡は46・47－11グリッドに位置する。第42・44・47・48号住居跡、第5号溝跡と重複し、本住居跡が最も古い。平面形は不整長方形であるが、かなり崩れている。規模は長軸長4.90m、短軸長3.60m、深さ0.85mである。主軸方位はN－11°－Wを指す。

底面は一定しない。中軸線上に高まりをもち、その東西に長方形土壙を二つもつような形状である。断面観察、及び平面的な掘り下げによっても明確な床面は認識できなかった。壁の立ち上がり確度は緩い。埋土はロームブロックと黒色土の混土層で、明らかに埋め戻されている。

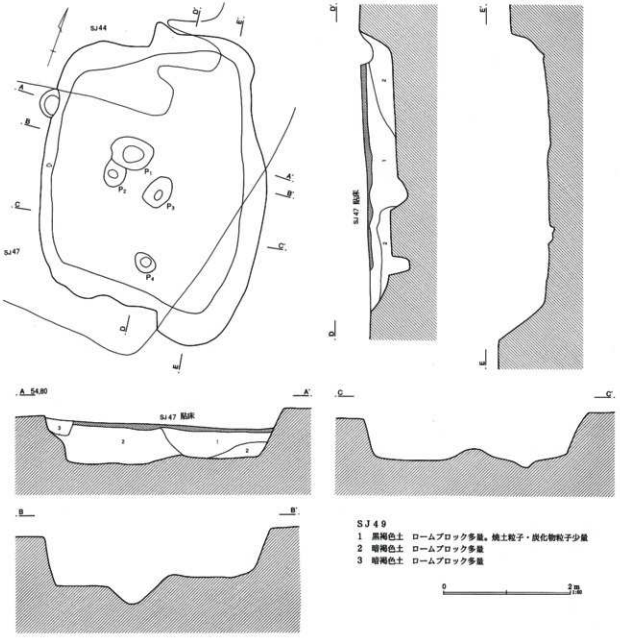
カマドは認められなかった。ピットは4本検出されたが、柱穴として良いか疑問である。その他の付属施設は検出されなかった。

このように通常の住居跡とは明らかに異なり、性格は不明確である。他に数例検出された特殊遺構と同様、土取りに使用された土壙と見た方が良いかもしれない。目的の土をより容易に得るために、床面を掘り抜いたという想定をすれば、本来は住居跡であった可能性は捨てきれない。

出土遺物は土師器坏・暗文坏・壺、須恵器坏・蓋・壺がある（第83図）。1～3は丸底の北武蔵型坏で、やや扁平化している。4・5は丸底暗文坏。内面に放射暗文が施される。6・7は須恵器蓋。7は内面にかえりが残る。8は須恵器坏。小振りの坏となろう。9は大振りの坏で、口縁部内面が沈線状に窪む。10は縁帯風の口縁部をもつ広口壺。胎土から湖西産と思われる。

須恵器は47片出土した。内訳は坏18点（末野産）、皿1点（末野）、甕9点（末野）、壺瓶類4点（末野3・湖西1）、蓋15点（末野14・南比企1）となる。時期は熊野Ⅱ期と考えられる。

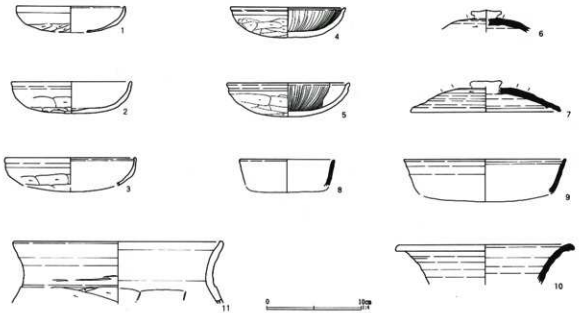
第82図　A区第49号住居跡



第38表　A区第49号住居跡出土遺物観察表（第83図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	(11.4)	2.7		AB	A	褐色	20%	覆土
2	土師坏	(12.6)	3.3		AB	A	橙褐色	15%	覆土。磨滅著しくｺﾛﾅﾃﾞ不明瞭
3	土師坏	(13.7)	2.9		AB	B	褐色	15%	覆土
4	土師暗文坏	(12.0)	3.2		AB	A	明褐色	35%	覆土。口唇内面沈線。放射暗文(下→上)
5	土師暗文坏	(12.8)	3.5		AB	A	明褐色	15%	覆土。内面放射暗文
6	須恵蓋		1.5		片	C	淡灰色	20%	覆土。末野産。つまみ剥離部切り込みあり
7	須恵蓋	(15.8)	2.6		C片	A	青灰色	25%	覆土。末野産
8	須恵坏	(10.0)	2.8		C片	B	淡灰色	10%	覆土。末野産
9	須恵坏	(17.0)	3.7		B片	C	灰色	5%	覆土。末野産
10	須恵広口壺	18.0	4.2		BF	A	灰白色	40%	覆土。湖西産。内面自然釉降灰
11	土師壺	(21.8)	6.5		ABC	A	明褐色	5%	覆土

第83図　A区第49号住居跡出土遺物



A区第51号住居跡（第84図）

第51号住居跡は47－12･13グリッドに位置する。第72・79号土壙に上面を削平されているが、遺構の遺存状態は良好である。平面形は縦長の長方形で、規模は長軸長4.50m、短軸長3.20m、深さ0.30mである。主軸方位はN－102°－Eを指す。

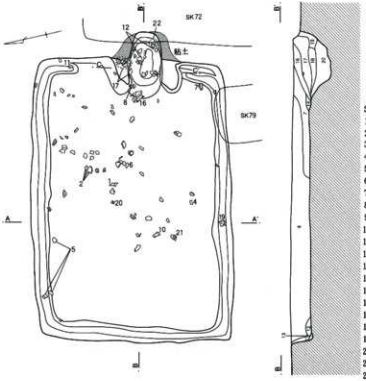
床面は概ね平坦で、堅く踏み固められていた。埋土には焼土粒子や炭化物粒子、ロームの混入が多く（第4・5・7層）含まれていた。特に北東コーナーから北壁中央付近にかけては覆土中に焼土が目立ち、遺物も集中する傾向が見られた。おそらく人為的に投棄されたものであろう。

カマドは東壁に設置され、先端は第72号土壙に削平されている。燃焼部周囲と袖部は粘土を積み上げて構築されていた。また、左袖内には、底部を欠いた土師器甕が潰れた状態で出土した。本来正位の状態で据えられていたものと思われ、袖の補強材に使用された可能性がある。燃焼部底面は鍋底状に掘り込まれ、側壁上部は強く被熱していた。第16・17層が天井部崩落土、第18層が灰層、第20層は掘り方埋土である。

ピットは検出されなかった。壁溝は全周する。深さは5～10cm程度である。

出土遺物は土師器坏・甕・小型甕、須恵器坏・高台坏・蓋・椀・高盤？と板状土製品がある（第85図）。遺物は住居中央から北東側に集中し、床面よりも浮いて出土したものが多い。第85図1～4は土師器坏。扁平な器形で丸底風であるが、底部の形成を意識したつくりになっている。2の底部外面には墨書が記されているが、墨痕は薄く、判読しがたい。「川」としたが、不明確である。5は坏。体部を幅広くヘラケズリしている。6～11は須恵器坏。6は推定口径12.6cmでやや深身の坏で末野産。7は扁平な坏で、底部回転糸切り後周辺部回転ヘラケズリ調整。南比企産である。9・11も7と同様な底部調整で、いずれも南比企産。8・10は混入と思われる。覆土上層出土。12は無台椀。口縁部内面に沈線状の窪みをもつ。底部は中心部に小さく糸切り痕を残し、周辺と体部下端は回転ヘラケズリ調整である。南比企産。13は蓋。14は高台坏で、高台は底部の外縁よりもかなり内側に付く。体部下端までヘラケズリ調整されている。胎土は粗く、末野産と思われる。いずれにしても混入である。15は高盤？の脚部片。脚部に透穴が開けられている。

第84図　A区第51号住居跡



SJ51
1　黒色土　（中世ピット）
2　黒褐色土　焼土粒子・ローム粒子微量
3　黒褐色土　焼土粒子・炭化物粒子微量。ローム粒子少量
4　暗褐色土　炭化物粒子・焼土粒子少量。ローム粒子多量
5　暗褐色土　炭化物粒子・焼土粒子多量。ローム粒子多量
6　暗褐色土　炭化物粒子・焼土粒子・ローム粒子微量
7　明褐色土　白色粘質土・焼土粒子混入。ロームブロック多量
8　明褐色土　ロームブロック
9　黒褐色土　ローム粒子少量
10　暗褐色土　炭化物粒子・焼土粒子・ローム粒子少量
11　暗褐色土　炭化物粒子・焼土粒子・ローム粒子少量
12　暗褐色土　炭化物粒子・焼土粒子・ローム粒子・ロームブロック多量
13　暗褐色土
14　暗褐色土　白色粘質土
15　明褐色土　ロームブロック多量
16　暗褐色土
17　灰白色粘質土　焼土粒子・ブロック多量
18　灰層　白色灰・炭化物
19　暗褐色土　焼土粒子・ローム粒子少量。灰白色粘質土粒子多量
20　暗褐色土　ローム粒子少量
21　暗褐色土　焼土ブロック・灰白色粘質土ブロック
22　灰白色粘質土　焼土化
23　灰白色粘質土　焼土粒子・ローム粒子少量

16～19は土師器甕。口縁部は緩いくの字、または弓状に外反する。23は板状土製品。図上で左端は弧を描くようにカットされている。表面と裏面はナデ調整されている。厚さ0.7cmほどで、土師質。硬質に焼き上がっている。置きカマドの炊口部付近の破片となる可能性ある。

須恵器は156片出土した。坏が122点（末野産88点・南比企産34点）、椀5点（南比企）、高台坏2点（末野）、蓋25点（末野24・南比企1）、壺瓶類1点（末野）、高盤1点（末野）となる。時期は熊野Ⅳ期と考えられる。

A区第52号住居跡（第86図）

第52号住居跡は47－13グリッドに位置し、第51号住居跡の北東に隣接する。重複遺構との新旧関係は第9号掘立柱建物跡を切り、第12号溝跡に覆土上面を削平されていた。平面形は縦長の長方形である。規模は長軸長3.96m、短軸長2.70m、深さ0.24mである。主軸方位はN－112°－Eを指す。

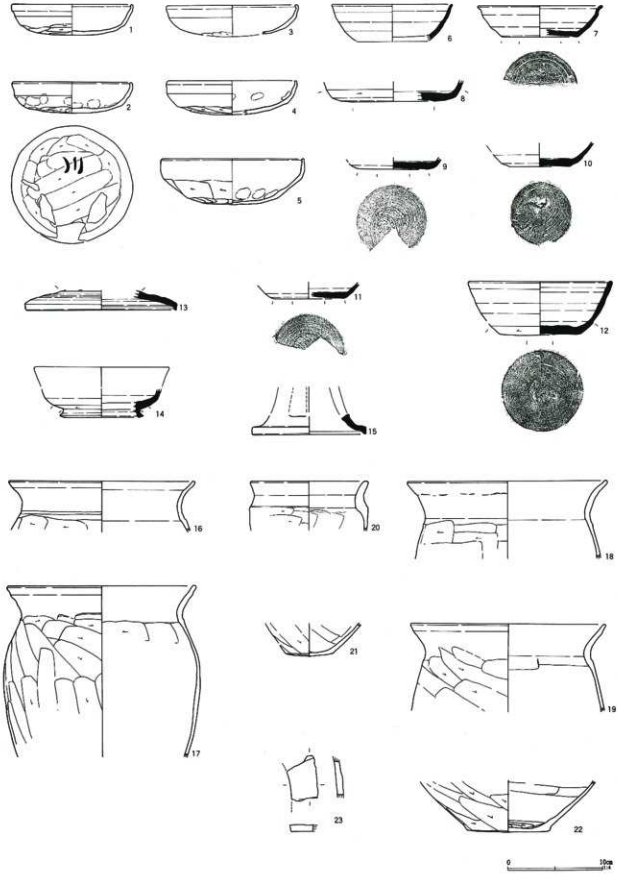
床面は住居中央部が高く、壁際が若干低い。全体に堅く踏み固められている。埋土は暗褐色土を基調とし、下層にローム粒子の混入が目立った（第2層）。

カマドは東壁に設置される。燃焼部は壁を切り込んで掘り込まれ、側壁は強く被熱していた。袖部は白色粘土を積み上げて構築されているが、上部はかなり流出していた。第4・5層が天井部崩落土、第6層が灰層に相当しよう。

ピット、壁溝は検出されなかった。

出土遺物は土師器坏・暗文坏・甕・小型甕、須恵器坏・蓋・高台椀・甕、鉄製品がある（第86図）。1は土師器坏。器形は扁平で、底部は平底風になる。混入と考えられる。2は平底暗文坏。内面に放射暗文が施される。3は南比企産の須恵器坏。2・3は

第85図　A区第51号住居跡出土遺物



第39表　A区第51号住居跡出土遺物観察表（第85図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	12.6	3.2		ABC	A	褐色	55%	№37。ほぼ床面
2	土師坏	12.5	3.2		ABC	A	淡褐色	95%	№21。覆土下層。底部外面に墨書「川」か
3	土師坏	13.6	3.1		ABCD	A	淡褐色	30%	覆土
4	土師坏	13.5	3.5		ABCD	A	褐色	70%	№56。床面
5	土師坏	15.0	4.8		ABCD	A	褐色	50%	№41・42・43。覆土下層～中層。内面指圧痕
6	須恵坏	(12.6)	3.8		片	A	灰色	20%	№26。覆土上層。末野産。外面火襷痕残る
7	須恵坏	(13.0)	3.3	(7.9)	CE針	A	灰白色	40%	№32。覆土下層。南比企産。底部B3b手法
8	須恵坏		2.2	(8.6)	BC	A	灰色	5%	№60。覆土上層。末野産か
9	須恵坏		1.2	7.3	BCE針	A	灰白色	75%	覆土。南比企産。底部B3b手法
10	須恵坏		2.5	6.5	BCE片	B	灰褐色	50%	№51。覆土上層。末野産。底部B0手法
11	須恵坏		1.7	(7.4)	B針	A	灰褐色	30%	№1。覆土中層。南比企産。底部B3b手法
12	須恵椀	15.0	5.7	8.5	BC針	A	灰色	60%	カマドNo81・83・84・90。南比企産。底部B3d手法
13	須恵蓋	(15.9)	2.1		BC針	A	灰色	5%	覆土。南比企産。天井部ケズリ
14	須恵高台坏		3.0	8.0	BCE	A	灰黒色	15%	覆土。末野産。体部下端ヘラケズリ
15	須恵高盤？		2.0	(12.0)	BCF	A	灰色	5%	覆土。末野産か。脚部透孔あり
16	土師甕	19.5	5.3		ABC	A	褐色	30%	カマドNo72。床面
17	土師甕	19.9	18.0		ABCD	A	褐色	45%	№86・103。左袖内
18	土師甕	21.0	8.2		ABC	A	褐色	45%	覆土
19	土師甕	(20.4)	9.2		ABC	A	褐色	20%	№57。床面
20	土師小型甕	(12.3)	5.2		ABC	A	淡褐色	10%	№38。覆土上層
21	土師甕		3.4	5.0	ABCD	A	褐色	60%	№52。覆土下層
22	土師甕		5.5	8.7	ABCD	A	明褐色	45%	カマドNo89・91・99・100
23	板状土製品	覆土。残長4.7cm。最大幅3.2cm。厚さ0.6cm							

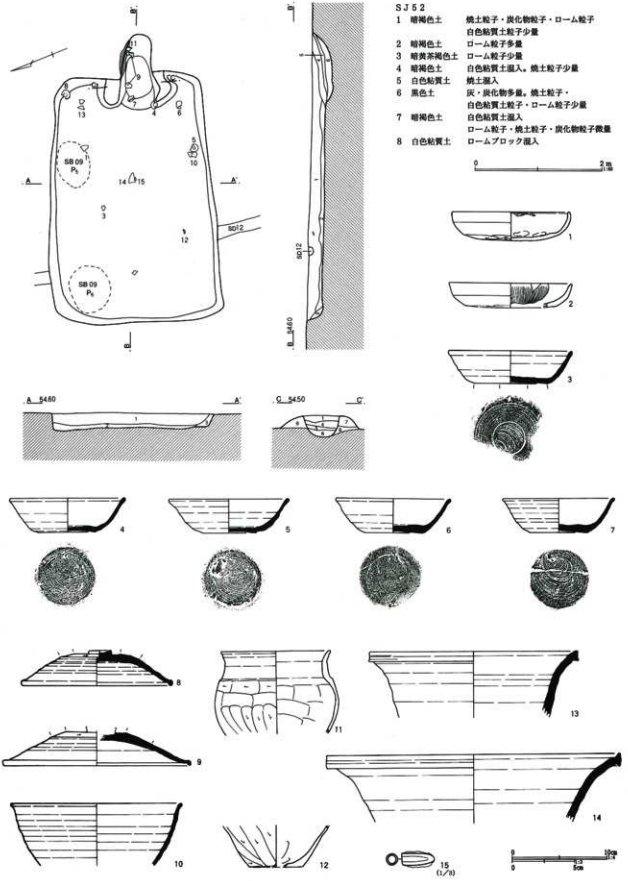
第40表　A区第52号住居跡出土遺物観察表（第86図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	12.3	3.0		AB	A	淡褐色	65%	№18。覆土上層。口唇部内面油煙付着
2	土師暗文坏	(13.0)	2.5	(9.4)	AB	A	明褐色	10%	覆土。内面放射暗文
3	須恵坏	(13.0)	3.4	(7.8)	針	A	灰白色	35%	№3。覆土中層。南比企産。底部B3b手法
4	須恵坏	12.0	3.6	6.0	C	A	淡灰色	70%	№29。覆土下層。末野産。大粒の礫含む。底部B0手法
5	須恵坏	12.5	3.6	5.6	CD片	C	褐色	90%	№7。覆土下層。末野産。底部B0手法
6	須恵坏	(12.0)	3.6	6.0	片	C	灰褐色	40%	№8。床面。末野産。底部厚い。底部B0手法
7	須恵坏	11.6	3.6	6.1	C片	C	黄灰色	70%	カマドNo11。末野産。底部B0手法
8	須恵蓋	15.7	3.7		片	A	暗青灰色	80%	№15。覆土下層。末野産。天井部糸切り痕残る
9	須恵蓋	19.7	3.4		F片	C	灰褐色	65%	№12・13。覆土中層～上層。末野産。つまみ剥落
10	須恵高台椀	(18.0)	6.5		C片	D	暗灰褐色	25%	№6。覆土下層。末野産。器面剥落
11	土師小型甕	(11.4)	8.7		ABD	A	茶褐色	30%	№14。カマド内
12	土師甕		4.4	(5.7)	AB	B	茶褐色	25%	№2。覆土下層
13	須恵甕	(22.0)	6.9		C片	A	暗灰色	15%	№17。覆土下層。末野産
14	須恵甕	(31.0)	7.2		C片	A	青灰色	20%	No4。床面。末野産
15	不明鉄製品	№5。床面。残長2.6cm。内側に木質遺存。柄の先端に付く金具（柄頭）か							

混入であろう。4～7は末野産の須恵器坏。ほぼ同巧で、平底の底部から口縁部にかけて緩やかに外反し、底部は回転糸切り後無調整である。口径は11.6～12.5cm、底径は5.6～6.1cm、高さは3.6cm。いずれも末野産。8・9は須恵器高台椀蓋で、大小ある。10は高台椀と考えられる。大振りの椀蓋（9）とセットとなろう。11は小型（台付）甕である。13・14は須恵器甕である。15は床面から出土した不明鉄製品。キャップ状で内部に木質が遺存する。

須恵器は80片出土した。内訳は坏が56点（末野産42点・南比企産13点・不明1点）、高台椀が2点（末野）、蓋が13点（末野10・南比企3）、甕7点（末野）、壺瓶類1点（末野）、鉢1点（末野）である。時期は熊野Ⅴ期～Ⅵ期前半と考えられる。

第86図　A区第52号住居跡出土遺物



A区第53号住居跡（第87図）

A区第53号住居跡は46・47－13グリッドに位置し、第52号住居跡の東側に隣接する。第14号掘立柱建物跡と重複し、本住居跡の方が新しい可能性が高いものと判断した。平面形は長方形で、規模は長軸長2.90m、短軸長2.15m、深さ0.10mである。主軸方位はN－114°－Eを指す。

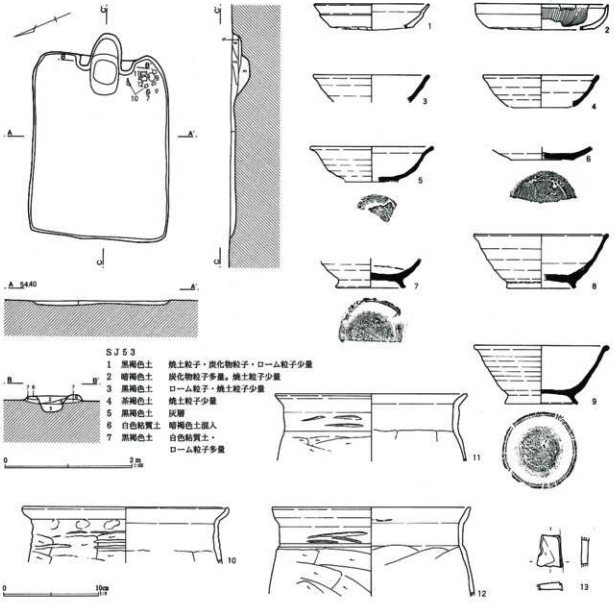
床面はやや凹凸をもち中央が高く壁際がやや低い傾向が認められた。カマド前面から住居中央部が堅く踏み固められ、その周囲は軟弱であった。埋土は焼土・炭化物混じりの黒褐色土を基調としていた。

カマドは東壁に設置される。燃焼部は壁を切り込んで掘り込まれ、底面は焚口部付近が深くなる。袖は白色粘土を使用しているが、遺存状態は悪い。第5層が灰層、第3層は掘り方埋土である。

ピット、壁溝は検出されなかった。

出土遺物は土師器坏・暗文坏・甕、須恵器坏・皿・高台椀、土師質板状土製品がある（第87図）。遺物量は少なく、カマド脇から須恵器高台椀と土師器甕がまとまって出土している。1は土師器坏。口縁部の屈曲が強く扁平な器形となる。体部はナデで、爪先状の圧痕が残されている。底部はヘラケズリ。2の

第87図　A区第53号住居跡・出土遺物



第41表　A区第53号住居跡出土遺物観察表（第87図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	(12.0)	2.5	8.8	A	A	褐色	10%	覆土
2	土師暗文坏	(14.0)	2.6	(11.2)	AB	A	明褐色	15%	覆土。内面放射暗文
3	須恵坏	12.0	2.9		C片	C	黄灰褐色	40%	覆土。末野産
4	須恵坏	(12.0)	3.2		A針	B	黄灰色	10%	覆土。南比企産
5	須恵坏	(12.7)	3.7	(5.6)	B片	A	暗灰色	25%	覆土。末野産。底部糸切り面2枚。底部B0手法
6	須恵皿		1.3	6.6	片	B	灰色	45%	覆土。末野産。底部B0手法
7	須恵高台椀		3.1	(6.7)	CD片	B	灰色	45%	№1。覆土。末野産。底部浅い沈線3条　ヘラ記号か
8	須恵高台椀	(14.0)	5.7	(6.6)	C片	A	淡灰色	25%	覆土。末野産。高台磨滅
9	須恵高台椀	(14.0)	6.1	7.5	C片	B	灰色	60%	№3。床面。末野産
10	土師甕	(21.6)	5.9		BG	A	褐色	10%	№2・8。覆土下層。ケズリ口縁部にも及ぶ
11	土師甕	(20.0)	7.1		AB	A	褐色	20%	№6。覆土
12	土師甕	(20.7)	9.4		ABC	A	褐色	45%	№7・9。覆土下層
13	板状土製品	覆土。残長3.3cm。最大径2.7cm。厚さ0.8cm。表面ﾅﾅ+ﾞケズリ、裏面ﾅﾅﾞ							

暗文坏は混入である。3・4・5は須恵器坏。5は体部の膨らみと口縁部の外反が強い。6は皿。7～9は高台椀。10～12は土師器「コ」の字状口縁甕。器壁は厚く、肩部の膨らみがほとんどない。また、胴部のケズリが口縁部まで及ぶなど、退化的な様相が認められる。13は土師質の板状土製品。図上で右側面がヘラでカットされている。表面がナデと軽いケズリ、裏面はナデ調整される。焼きは硬質である。置きカマドの一部となる可能性がある。

須恵器は72片出土した。内訳は坏が47点（末野産40・南比企産7）、高台椀が9点（末野）、皿が1点（末野）、蓋が7点（末野）、高台盤が1点（末野）、甕が7点（末野）である。時期は熊野Ⅵ期と考えられる。

A区第54号住居跡（第88図）

A区第54号住居跡は46－14グリッドに位置する。第84号土壙に一部上面を攪乱されるが、遺構の遺存状態は良好である。平面形は長方形で、規模は長軸長3.00m、短軸長2.46m、深さ0.54mである。主軸方位はN－86°－Eを指す。

床面は概ね平坦であるが、住居中央部が円形土壙状に浅く沈下していた。当初、床下土壙の上面が沈下したものと考えたが、下面に土壙は検出できなかった。全体に堅く締まっており、カマド前面から住居中央部にかけては特に良く踏み固められていた。

埋土にはロームブロックや黒色土ブロックが多量に含まれ（第2～5層）、人為的に埋め戻された可能性がある。

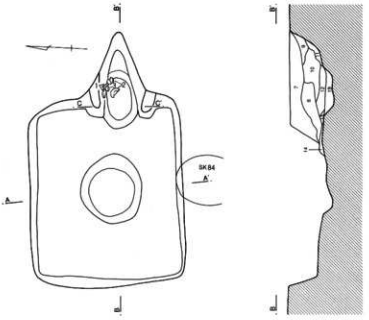
カマドは東壁に設けられていた。燃焼部は壁を切り込んで掘り込まれ、底面は2段に窪んでいる。第12・13層が灰層、第19層は掘り方埋土と思われる。袖部はブラックバンドに由来すると思われる土を混ぜた褐色系の粘質土を積み上げて構築されているが、かなり流出していた。

ピット、壁溝は検出されなかった。

出土遺物は少なく、土師器暗文坏・甕、須恵器坏・長頸瓶、灰釉陶器長頸瓶がある（第88図）。1は土師器甕で、胴部器壁は薄く、口縁部は緩やかに外反する。2は須恵器坏。扁平でぽったりしたつくりである。底部から体部下半は器壁が厚く、底部は回転糸切り後無調整。見込部に線刻で「十」状に刻まれている。末野産。3は平底暗文坏で、内面に放射暗文と螺旋暗文が施される。1～3はいずれもカマド内から出土したもので、住居に伴う遺物と考えて良かろう。4は灰釉陶器長頸瓶胴部片。胎土はきめ細かく、黒色粒子が目立つ。非東濃産、おそらく猿投から三河地域の産と推定される。覆土から出土したもので混入であろう。5は須恵器長頸瓶肩部片。肩部沈線の上部に櫛歯状工具による連続刺突文が刻まれている。末野産と思われる。混入の可能性が高い。

須恵器は27片出土し、内訳は坏が10点（末野産8・南比企産2点）、（高台？）椀1点（末野）、蓋3点

第88図　A区第54号住居跡・出土遺物



第42表　A区第54号住居跡出土遺物観察表（第88図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師甕	(21.0)	10.2		A B D	A	褐色	30%	カマド内№1・№2
2	須恵坏	12.5	3.6	7.0	C片	B	黄灰色	70%	カマド内№5・6。末野産。底部ふ浮い。底部B0手法
3	土師暗文坏	(13.0)	2.7	(9.7)	A B	A	茶褐色	30%	カマド内№3。内面放射暗文＋螺旋暗文
4	灰釉長頸瓶		4.3		F	A	灰白色	5%	覆土。猿投～三河産か（非東濃）
5	須恵長頸瓶		3.0		B D	C	淡灰色	5%	覆土。末野産。肩部列点文＋沈線1条

（末野）、壺瓶類３点（末野２点・不明１点）、甕10点（末野）である。時期は熊野Ⅲ期新相～Ⅳ期古相と考えられる。

Ａ区第55号住居跡（第89図）

Ａ区第55号住居跡は調査区南東部の48－13・14グリッドに位置する。北壁部周辺が検出されたのみで遺構の大半は調査区外に延びている。平面形は方形系と推定される。残存規模は長軸長4.80ｍ、短軸長0.96ｍ、深さ0.60ｍである。主軸方位は北壁を基準に採るとＮ－100°－Ｅを指す。

床面は平坦である。埋土は黒褐色土を基調としていた。床面下に土壙が１基検出されたのみで、カマドや貯蔵穴、ピットは調査区内からは検出されなかった。壁溝は巡っていた。

出土遺物は僅少で、図化可能なものは須恵器蓋１点に留まる（第89図１）。須恵器は７片出土し、内訳は坏が３点（末野産１・南比企産２）、蓋が３点（末野）、甕が１点（末野）である。時期は不明確であるが、熊野Ⅱ期と考えておきたい。

第89図１は須恵器蓋。推定口径18.0㎝、残存高1.7㎝。胎土に片岩を含む。焼成は普通で、色調は灰褐色。内面にかえりが付く。末野産である。

Ａ区第56号住居跡（第90図）

Ａ区第56号住居跡は45－11･12、46－12グリッドに位置する。住居西半は町教育委員会によって既に調査されている。重複する第57号住居跡を切って構築されている。また、第77号土壙は住居内に納まる形で重複し、部分的に床面を削平していた。第118号土壙、第43号溝跡は覆土上面を削平していた。

平面形は長方形で、規模は長軸長4.80ｍ、短軸長4.26ｍ、深さ0.60ｍである。主軸方位はＮ－89°－Ｅを指す。

床面は平坦で堅く締まっていた。埋土は焼土・炭化物粒子混じりの暗褐色から黒褐色土を基調としており、特に埋め戻されたような痕跡は認められなかった。

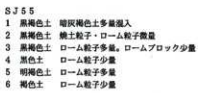
カマドは東壁に設置される。燃焼部は概ね壁内にあり、緩やかな傾斜で壁外に延びる煙道部に連続する。第１～３層が天井部崩落土、第４層が灰層である。袖部は灰色粘土を主体に構築されていたが、かなり流出していた。

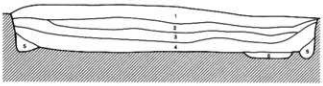
ピット及び壁溝は調査区内からは検出されなかった。

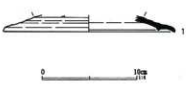
出土遺物は土師器坏・暗文坏・甕、須恵器坏・高台椀・蓋・長頸瓶・甕、鉄鏃、土錘がある（第91図）。南壁直下からは土師器坏（１）、暗文坏（４）、須恵器高台椀（14）が重なった状態で出土した。その南側には土師器甕（20）とほぼ完形の須恵器坏（７・８）が検出されている。

第91図１～３は土師器坏。１は平底風。２は平底になると思われる。３はやや丸底風。４・５は大振りの暗文坏。体部を削り、底部は平底風となる。内

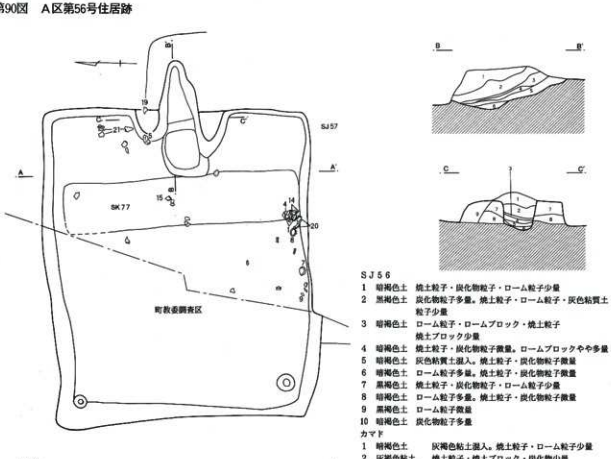
第89図　Ａ区第55号住居跡・出土遺物







第90図　A区第56号住居跡



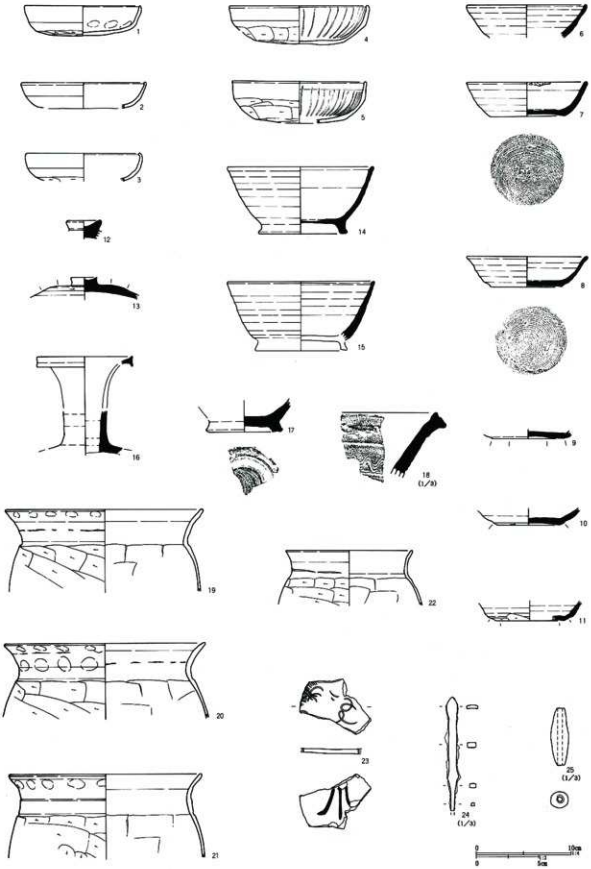
面に放射状暗文が施される。見込部に螺旋暗文があるようにも見えるが、不鮮明。6～11は須恵器坏。口径12.6cm、底径7.5cmほどの扁平な坏で、底部は回転糸切り後無調整のもの（7・8）とヘラで再調整を施すもの（9～11）がある。12・13は高台椀蓋と思われる。14・15は高台椀。15は口唇部に内傾面をもち、14は内傾面が弱く、腰の張りもないなど、より新しい要素が見える。16・17は南比企産の長頸瓶。18は須恵器甕で、櫛描波状文が施される。19～21は土師器甕。口縁部上半の屈曲が強まり、「コ」の字状口縁甕に近づいているものがある。23は暗文坏底部で、薄い墨痕がある。「川」にも読めるが字形は不明とした方がよい。24は鉄鏃で、先端部は折損しているものと思われる。25は土錘。

須恵器は197片出土し、内訳は坏が128点（末野産99・南比企産29）、高台椀10点（末野）、盤3点（末野）、蓋21点（末野19・南比企2）、壺瓶類9点（末野6・南比企3）、甕25点（末野）、器種不明1点（産地不明）である。時期は熊野Ⅳ期と考えられる。

A区第57号住居跡（第92図）

A区第57号住居跡は46－12グリッドに位置する。第56号住居跡、第53号土壙によって床面まで攪乱を受けている。覆土上面は49・118号土壙、第43号溝跡に削平されていた。調査当初、カマド北側に粘土の広がったコーナーが検出されたため、2軒重複したものと考え、カマド部分を58号住居跡としたが、調

第91図　A区第56号住居跡出土遺物



第43表　A区第56号住居跡出土遺物観察表（第91図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	12.1	3.2		A B	B	褐色	85%	№3・33。覆土下層
2	土師坏	(13.0)	2.7		A B	B	褐色	10%	覆土
3	土師坏	12.0	2.9		A B	B	褐色	35%	カマド。全体に歪みあり
4	土師暗文坏	(14.5)	4.1	9.4	A B	A	褐色	55%	№6。覆土下層。内面放射暗文
5	土師暗文坏	(14.0)	4.3		A B	B	褐色	45%	№24。ほぼ床面。内面放射暗文
6	須恵坏	(12.5)	3.5		C片	B	淡灰色	15%	覆土。末野産
7	須恵坏	12.6	3.6	7.6	C片	B	灰褐色	95%	№9。覆土下層。末野産。口縁油煙付着。底部B0手法
8	須恵坏	12.6	3.2	7.5	C片	B	暗灰褐色	95%	№1。覆土下層。末野産。底部B0手法
9	須恵坏		0.7	(7.7)	B針	A	青灰色	35%	№12。床面。南比企産。底部B3b手法
10	須恵坏		1.8	6.6	C片	B	黄灰色	35%	覆土。末野産。底部B3c手法
11	須恵坏		2.1	(7.2)	C片	A	灰色	40%	覆土。末野産。B2d手法。2片より接合しない
12	須恵蓋		1.9		C片	B	黄灰色	90%	覆土。末野産。蓋鈕
13	須恵蓋		2.3		C片	A	灰色	35%	覆土。末野産。天井部内面磨滅
14	須恵高台椀	15.2	7.0	9.0	C片	B	淡灰色	95%	№4・5他。覆土下層。末野産
15	須恵高台椀	(15.5)	6.1		C	A	灰褐色	5%	№23。覆土下層。末野産
16	須恵長頸瓶	(10.0)	(10.2)		B針	A	灰色	5%	カマド。南比企産
17	須恵長頸瓶		3.3	7.8	C針	A	暗青灰色	25%	覆土。南比企産。底部回転糸切り
18	須恵甕		5.2		C	A	暗紫灰色		覆土。末野産。沈線＋櫛描波状文(3本1組)施文
19	土師甕	(20.6)	8.7		A B	A	褐色	30%	№25。カマド内
20	土師甕	(21.0)	8.0		A B	A	茶褐色	35%	№2。覆土下層
21	土師甕	(20.2)	8.9		A B	A	褐色	20%	№26・30。覆土下層
22	土師小型甕	(13.2)	5.8		A B	B	茶褐色	30%	カマド
23	土師暗文坏				A B	A	明褐色		覆土。底部外面墨書
24	鉄鎌	覆土。残長9.0cm。刃部欠損品か							
25	土錘	覆土。長さ4.6cm。最大径1.4cm。孔径0.4cm。重さ6.96ｇ。胎土B。焼成A。褐色。残存100%							

査の結果、同一住居と判明した。平面形は方形で、規模は長軸長4.86ｍ、短軸長4.65ｍ、深さ0.48ｍである。主軸方位はＮ－90°－Ｅを指す。

床面は第56号住居跡、第53号土壙によって削平されているが、残存部分は平坦で堅く締まっている。埋土はローム ブロックや明褐色土ブロックを含む暗褐色土を基調としており、南側から投棄されたような状況が観察された。

カマドは東壁の南寄りに設置される。燃焼部は壁を切り込んで掘り込まれ、焚口部付近は第53号土壙に破壊されていた。燃焼部側壁上部は被熱していた。第７層下面が火床面と推定される。袖部は灰色粘土を積み上げて構築され、左袖には土師器甕が補強材として使用されていた。カマド北側の壁外には深さ10cmほどの掘り込みがあり、カマドに由来する灰色粘土が堆積していた。本住居に伴うのは間違いなく、棚状施設と考えても良かろう。

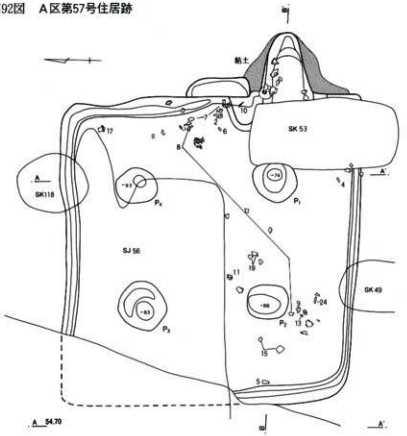
ピットは４本検出された。深さもあり、配置も規則的で主柱穴と考えられる。埋土は不自然で、抜き取られた可能性が高いものと判断した。

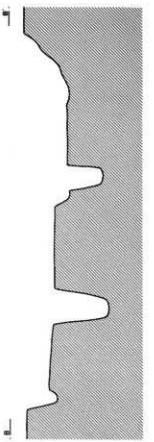
貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は巡っている。

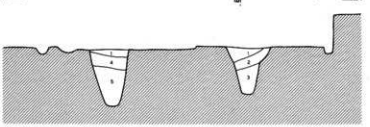
出土遺物は土師器坏・暗文坏・甕、須恵器坏・蓋・高台盤・高盤・鉄製品がある（第93図）。

１～５は土師器坏。扁平な器形で、弱い丸底形態が主体となる。４は口縁部が内彎する丸底坏で、混入と思われる。体部外面に「内」の墨書が記されている。６は平底暗文坏。内面に放射暗文が施されている。７～10は須恵器坏。口径13.6～14.2cm。７は末野産の坏で、底部は回転ヘラケズリ調整されるが、中心部に糸切り痕が僅かに見える。焼きは甘い。８・９は南比企産の坏。底部は回転糸切り後、周辺部が再調整される。10は末野産または群馬産か。体部下端に腰をもつ。底部は回転ヘラケズリ調整。11は高台盤。破片の一部は重複する56号住居跡に混入して

第92図　A区第57号住居跡

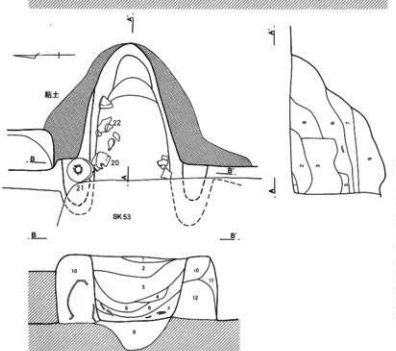






SJ57
1　暗褐色土　ロームブロック少量
2　黒褐色土　ロームブロック微量
3　黒褐色土　ローム粒子少量
4　暗褐色土　ロームブロック多量
5　暗褐色土　暗茶褐色土ブロック多量

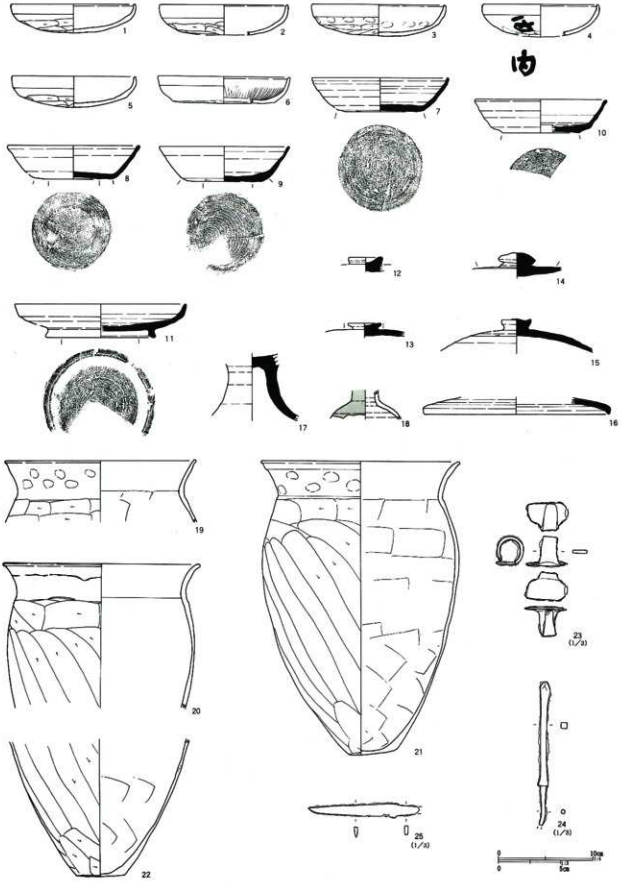
0　2m



カマド
1　暗褐色土　ロームブロック・焼土粒子・炭化物粒子少量
2　暗褐色土　ロームブロック多量
3　暗褐色土　ローム粒子・ロームブロック少量
4　暗褐色土　明褐色土ブロック多量，ロームブロック少量
5　黒褐色土　暗茶褐色土ブロック多量
6　黒褐色土　暗茶褐色土粒子少量
7　暗褐色土　ロームブロック多量
8　灰色粘土　暗褐色土混入
9　灰色粘土　灰色粘土粒子・焼土粒子・炭化物粒子少量
10　灰色粘土　砂粒混入
11　灰色粘土　ロームをブロック状に混入
12　灰色粘土

0　1m

第93図　A区第57号住居跡出土遺物



第44表　A区第57号住居跡出土遺物観察表（第93図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	(13.0)	3.0		A	A	橙褐色	30%	覆土
2	土師坏	(13.4)	3.2		A B	B	黄褐色	20%	№29。覆土中層
3	土師坏	(14.0)	3.3		A B	A	橙褐色	35%	覆土
4	土師坏	(12.0)	3.3		A B	A	橙褐色	20%	№21。覆土下層。体部外面「内」の墨書あり
5	土師坏	13.0	3.2		A B	B	橙褐色	80%	№1。覆土下層
6	土師暗文坏	(13.8)	2.8	(10.8)	A B	A	明褐色	15%	№30。覆土下層。内面放射暗文
7	須恵坏	(14.2)	3.5	9.0	C片	C	橙褐色	50%	№27・32。覆土上層。末野産。底部B3a手法
8	須恵坏	(13.7)	3.5	8.2	B針	A	淡青灰色	40%	№9・31。覆土下層。南比企産。底部B3b手法。火襷痕
9	須恵坏	(13.6)	3.7	7.9	B針	A	灰白色	40%	№8。覆土中層。南比企産。底部B3d手法
10	須恵坏	(13.7)	3.5	(8.0)	A C	B	明灰色	50%	№26。覆土上層。末野または群馬産。底部3a手法か
11	須恵高台盤	(18.1)	3.5	11.4	C片	A	暗青灰色	40%	№12。末野産。底部3a手法。口縁と体部合成図化
12	須恵蓋		1.5		C片	B	淡褐色	90%	覆土。末野産
13	須恵蓋		1.4		片	B	灰色	40%	№10。覆土下層。末野産
14	須恵蓋		2.4		C片	A	青灰色	40%	覆土。末野産
15	須恵蓋		3.6		針	A	青灰色	35%	№2・№3。覆土下層。南比企産
16	須恵蓋	(19.4)	1.7		C片	C	黄褐色	10%	覆土。末野産
17	須恵高盤		6.9		C片	C	暗灰色	75%	№38。覆土下層。末野産
18	灰釉小型長頸瓶		3.1		F	A	明灰色	35%	覆土。猿投産。胎土緻密
19	土師甕	(20.0)	6.5		A B	B	黄褐色	25%	№14・15。ほぼ床面
20	土師甕	20.2	15.3		A	B	褐色	20%	№11。カマド内
21	土師甕	20.6	30.8	5.2	A B C	B	茶褐色	95%	№15。カマド左袖内。胴中位以下煤付着
22	土師甕		14.4	5.0	A B D	B	茶褐色	15%	№7。カマド
23	不明鉄製品	覆土。径約2.0cm。							
24	鉄鎌	№19。覆土下層。残長11.3cm。鎌身部。							
25	刀子	覆土。残長8.5cm。柄部欠失。							

いた。底部は回転ヘラケズリ。12～16は蓋。17は高盤脚部である。18は灰釉陶器小型長頸瓶。外面は緑灰色の釉が掛けられている。胎土は緻密で丁寧なつくり。非常に硬質に焼き上がっている。猿投産と推定される。覆土から出土したもので混入と考えられる。19～21は土師器甕。21はカマド左袖内に倒立状態で埋め込まれていた。カマドの補強材として使用されたものであろう。23は不明鉄製品。桑摘み具かもしれない。混入品と思われる。24は鉄鎌。刃部は銹化が激しく不明瞭。25は刀子である。須恵器は123片出土し、内訳は坏が69点（末野産56・南比企産12・群馬産？1）、高台椀2点（末野産）、高台盤4点（末野）、高盤1点（末野）、蓋15点（末野14・南比企1）、壺瓶類4点（末野）、甕28点（末野）である。時期は熊野Ⅲ期と考えられる。

A区第58号住居跡（第94図）

A区第58号住居跡は、調査区北東部の38－17グリッドに位置する。第39号溝跡が重複し、平面観察から明らかに本住居跡の方が新しい。平面形は方形で、規模は長軸長4.14m、短軸長3.96m、深さ0.48mである。主軸方位はN－37°－Eを指す。

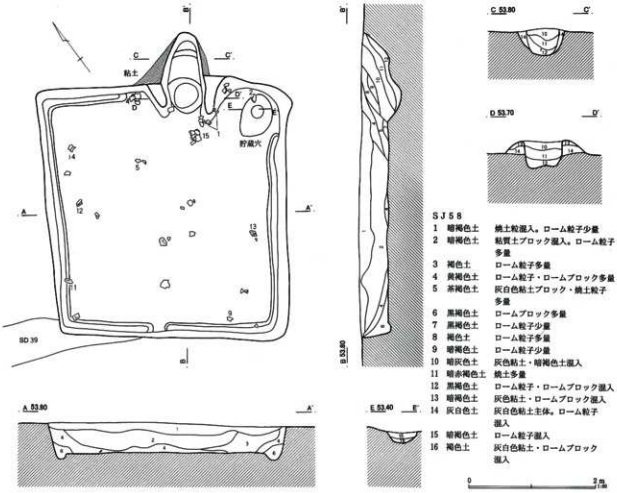
床面は全体に平坦で堅く締まっていた。埋土はローム粒子や粘質土・ロームブロックが多量に含まれ（第2～4層）、人為的に埋め戻された可能性がある。

カマドは北東壁に設置される。燃焼部から煙道部にかけては壁を切り込み、底面は2段に掘り込まれていた。両側壁と袖は灰白色粘土を主体に構築されており、壁面は帯状に被熱していた。第8～11層が天井部崩落土、第12層は掘り方埋土と考えられる。12層上面に薄い灰層が形成されており、火床面に相当しよう。

ピットは検出されなかった。貯蔵穴はカマド右脇のコーナー部にある。楕円形プランで、規模は長径72cm、短径48cm、深さ17cm。

壁溝はカマドの周囲と南西壁の一部が途切れる。深さ5～10cm。

第94図　A区第58号住居跡

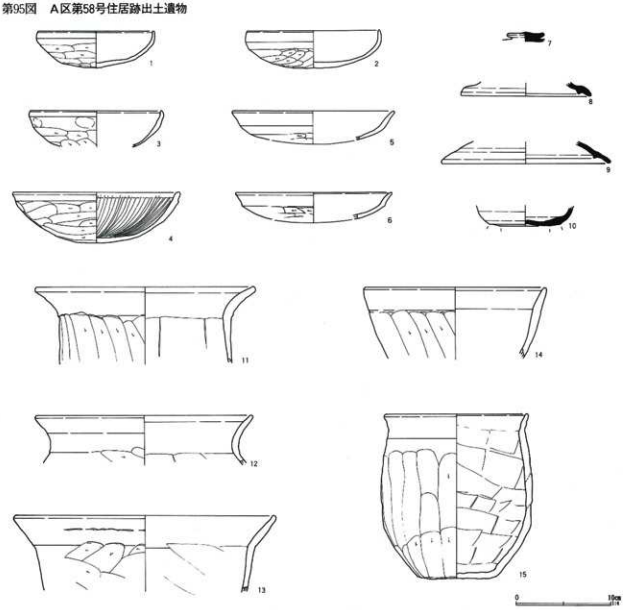


第45表　A区第58号住居跡出土遺物観察表（第95図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	12.3	3.9		AB	A	赤褐色	100%	カマドNo2。右袖内
2	土師坏	(14.0)	4.0		ABC	A	褐色	15%	No27。覆土下層
3	土師坏	(13.8)	3.8		ACF	B	暗褐色	15%	覆土
4	土師暗文坏	17.4	5.4		ABC	B	橙褐色	85%	No33。覆土下層。内面放射暗文
5	土師皿	(17.0)	3.0		AB	A	褐色	10%	No22。覆土下層
6	土師皿	(16.5)	2.8		ABC	A	褐色	10%	覆土
7	須恵蓋		1.0		C片	B	灰色	100%	覆土。未野産
8	須恵蓋	(13.7)	1.5		B	A	灰色	5%	覆土。未野産?
9	須恵蓋	(17.8)	2.3		B片	A	灰色	10%	No10。覆土中層。未野産
10	須恵坏		2.1	7.5	B片	A	青灰色	15%	覆土。未野産。底部A3b手法
11	土師甕	(22.8)	8.2		ABD	A	褐色	45%	No5。覆土中層
12	土師壺	(22.6)	5.2		ABD	B	褐色	10%	No3。覆土下層
13	土師甑	(27.2)	8.1		ABG	A	赤褐色	10%	No16。覆土下層
14	土師甑?	(19.0)	7.5		AB	B	茶褐色	10%	No1。覆土下層
15	土師甕	(15.0)	17.2	8.3	B	C	褐色	50%	No24。床面

出土遺物は土師器坏・暗文坏・甕・小型甕・甑、須恵器坏・蓋がある（第95図）。1～3は土師器坏。丸椀形態で、口縁部を僅かに内彎気味に納める。1はカマド右袖先端から出土したもので、ほぼ完形。4は大振りの暗文坏。内面に放射暗文が施文される。5・6は皿。7～9は須恵器蓋。10は須恵器坏。底

第95図　A区第58号住居跡出土遺物



部はヘラ切り後、周辺部を回転ヘラケズリ調整している。末野産。11は土師器甕で、胴部は縦方向のヘラケズリ調整。13は甑と思われる。15は小型甕で、床面出土。

須恵器は18片出土し、内訳は坏が5点（末野産）、蓋が5点（末野4点・不明1点）、甕が7点（末野）、壺瓶類が1点（末野）である。時期は熊野Ⅱ期と考えられる。

A区第59号住居跡（第96図）

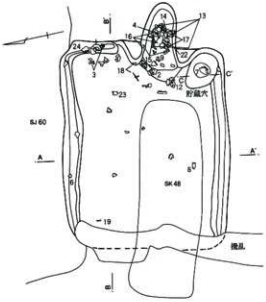
A区第59号住居跡は47−12グリッドに位置する。第60号住居跡を切り、第48号土壙に切られていた。また、西壁部は攪乱を受け床面が削平されていた。

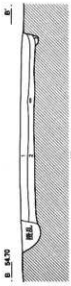
平面形は長方形で、規模は長軸長3.30m（推定）、短軸長2.70m、深さ0.25mである。主軸方位はN−109°−Eを指す。

床面は若干起伏があるが、全体に堅く踏み固められていた。第48号土壙の底面はほぼ床面と同一レベルであった。埋土はローム粒子混じりの暗褐色土を基調としていた。

カマドは東壁に設けられ、燃焼部は壁ラインを切り込み、底面は鍋底状に掘り込まれていた。第1〜3層が天井部崩落土、第4層が灰層である。5・6層は掘り方埋土と考えられる。袖及び天井部は灰色〜黄灰色粘質土を積み上げて構築されていた。カマ

第96図　A区第59号住居跡





SJ59

1　暗褐色土　ロームブロック少量。ローム粒子・焼土粒子混入

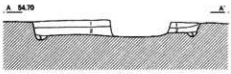
2　暗褐色土　ローム粒子少量

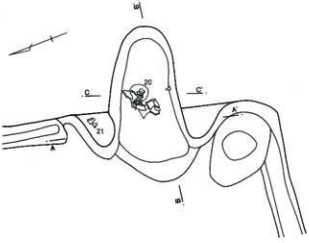
3　暗褐色土　ロームブロック多量

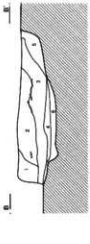
貯蔵穴

1　黒褐色土　ローム粒子微量

2　黒褐色土　灰色粘質土混入







カマド

1　暗褐色土　ローム粒子・粘土粒子・焼土粒子多量

2　褐色土　黄灰色粘土ブロック・焼土粒子混入

3　褐色土　焼土ブロック・粘質土粒子混入

4　黒褐色土　灰・炭化物粒子・焼土粒子混入（灰層）

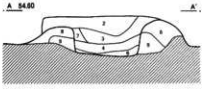
5　明褐色土

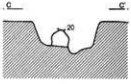
6　暗褐色土　ロームブロック

7　明褐色土　灰白色粘質土・ロームブロック混入

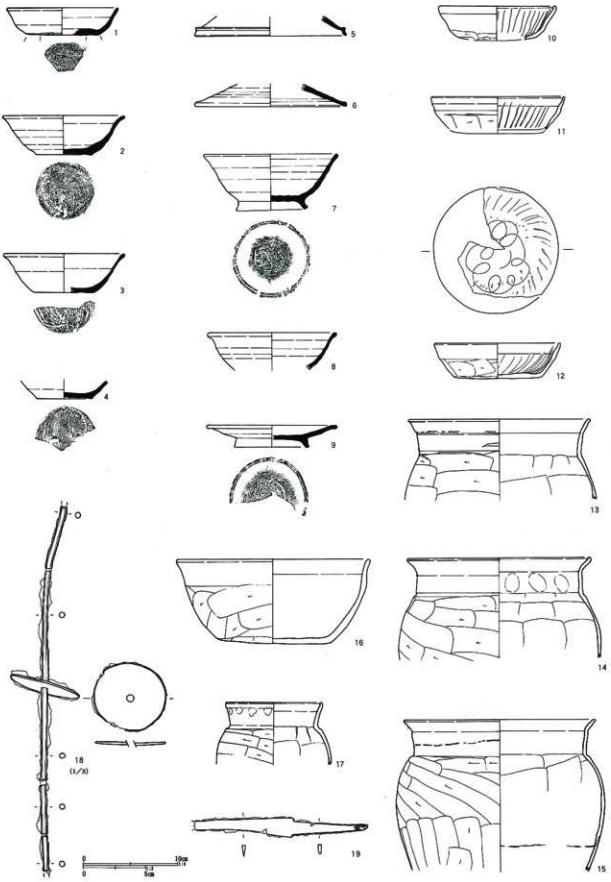
8　灰色粘質土　黒褐色土混入。焼土粒子・ローム粒子微量

9　灰色粘質土　黒褐色土・ロームブロック混入

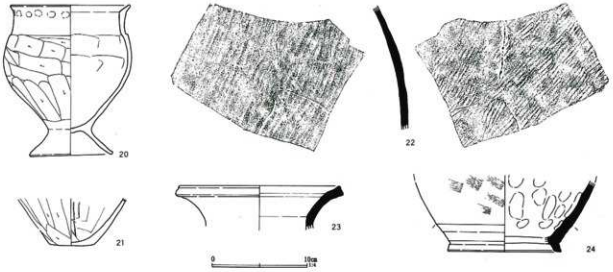




第97図　A区第59号住居跡出土遺物(1)



第98図　A区第59号住居跡出土遺物(2)



第46表　A区第59号住居跡出土遺物観察表（第97·98図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵坏	(11.7)	2.8	(7.6)	片	B	淡灰色	20%	覆土。末野産。底部B2b手法
2	須恵坏	12.8	4.1	5.7	BD片	B	淡褐色	75%	№29。覆土。末野産。底部B0手法
3	須恵坏	(12.6)	4.1	6.4	D片	B	淡褐色	40%	№16・25。覆土。末野産。底部B0手法
4	須恵坏		2.0	6.0	片	A	灰色	30%	カマド内№13。末野産。底部B0手法
5	須恵蓋	(15.8)	2.0		BC	A	灰黒色	10%	カマド。産地不明
6	須恵蓋	(15.8)	2.4		片	B	淡灰色	15%	№5。覆土下層。末野産。皿の可能性もある
7	須恵高台椀	14.0	6.0	7.0	BD片	B	灰色	80%	貯蔵穴内№1。末野産
8	須恵高台椀	(13.4)	4.0		C片	B	灰色	20%	№8。床面。末野産
9	須恵高台皿	13.4	2.3	7.8	B片	B	淡褐色	30%	№31。覆土上層。末野産
10	土師暗文坏	(12.2)	3.5		ABC	A	褐色	30%	カマド。内面放射暗文
11	土師暗文坏	14.0	3.4		A	A	褐色	20%	カマド。内面放射暗文
12	土師暗文坏	13.2	3.8	9.2	ABCD	A	褐色	50%	№37。覆土下層。放射十螺旋暗文
13	土師甕	19.0	8.5		A	B	淡褐色	30%	カマド内№5·17·25
14	土師甕	19.2	10.5		A	B	茶褐色	50%	カマド内№29
15	土師甕	20.2	16.0		A	B	茶褐色	25%	カマド内№1·6·12他
16	土師鉢	20.2	9.0	12.0	A	B	茶褐色	80%	カマド内№1·10·21他
17	土師小型台付甕	10.0	6.6		A	A	淡褐色	40%	カマド内№7·27·34
18	鉄製紡錘車	№1(残長6.7cm)№2(径約5.7cm　厚さ0.2cm)№3(残長21.5cm)。覆土							
19	刀子	№4。残長13.7cm。切先欠失。木質付着。さび著しく形状推定							
20	土師小型台付甕	12.5	15.9	8.6	AB	B	褐色	95%	カマド内№30
21	土師甕		4.9	4.5	BC	B	茶褐色	50%	№52。覆土
22	須恵甕				C片	B	淡灰色	15%	カマド内№8。末野産。外面白色の自然釉付着
23	須恵壺	(17.0)	4.7		B片	A	灰黒色	15%	№12。覆土。末野産
24	須恵長頸瓶		8.0	(11.8)	針	A	灰色	20%	№14。覆土下層。南比企産

ドからの出土遺物は多く、特に燃焼部底面からは土師器台付甕が伏せられた状態で出土した。支脚に転用されたものと推定される。

ピットは検出されなかった。貯蔵穴はカマド右脇のコーナー部に設置されていた。楕円形で、規模は長径60cm、短径45cm、深さ25cm。

壁溝はカマドの周囲を除き巡っていた。南壁部では明確に検出できたが、北壁部のそれはやや不鮮明であった。

出土遺物はカマドとその周囲から比較的まとまって検出された。器種としては、土師器暗文坏・甕・台付甕・鉢、須恵器坏・高台椀・高台皿・甕・長頸

瓶、鉄製紡錘車・鉄製刀子がある（第97・98図）。

1～4は須恵器坏。1は底部再調整を施す坏で、混入と思われる。2～4は口縁部が緩やかに外反するやや深身の坏。5は蓋。6は蓋としたが、皿の可能性もある。7・8は高台椀。9は高台皿。いずれも末野産である。10～12は平底暗文坏。10は体部下端から底部をヘラケズリ、11・12は体部と底部をヘラケズリする。暗文は12のように放射十螺旋暗文が施されるものであろう。13～15は「コ」の字状口縁甕。13は口縁部上端の屈曲が弱い。16は鉢。17は小型甕。18は鉄製紡錘車である。覆土出土。19は刀子。銹化が進み形態は不明瞭。切先を欠く。柄部には木質が遺存する。20は小型台付甕。カマド燃焼部の火床面に倒立状態で据えられていた。支脚に転用されたものと推定される。22は甕胴部片。外面は粗い平行叩き、内面は一見平行叩き風であるが、先端に平行溝を切った当て具の圧痕である。24は南比企産の長頸瓶。胴部外面は平行叩き後、丁寧なナデ、下端は回転ヘラケズリ。内面は無文当て具痕。

須恵器は114片出土し、内訳は坏が54点（末野産）、高台椀4点（末野）、皿15点（末野）、高台皿3点（末野）、蓋17点（末野13・南比企2・産地不明2）、壺瓶類2点（南比企）、甕17点（末野）、鉢2点（末野）である。時期は熊野Ⅵ期後半と考えられる。

A区第60号住居跡（第99・100図）

A区第60号住居跡は46・47－12グリッドに位置し、第43・59号住居跡、第49・50号土壙に切られているが、いずれも床面までは達しておらず、遺存状態は比較的良好であった。平面形は整った方形で、規模は長軸長5.90m、短軸長5.65m、深さ0.54mである。主軸方位はN－1°－Eを指す。

床面は若干起伏があるが、全体に堅く踏み固められていた。埋土は第4層中にロームブロックが多量に含まれ、ある程度埋没した段階で埋め戻された可能性がある。また、第1～3層は覆土中に掘り込まれた土壙状の掘り込みと思われる。

カマドは北壁ほぼ中央に設置される。燃焼部は壁を切り込み、先端は直角近い角度で立ち上がる。第13～15層が天井部崩落土、第16層が灰層、第17・18層が掘り方埋土と考えられる。燃焼部火床面には土師器甕が1個体、伏せた状態で出土した。袖は灰色粘土を主体に構築され、燃焼部側壁上端は強く被熱していた。

ピットは4本規則的に配置され、いずれも主柱穴と考えられる。深さは53cm～75cm。Pit1を除いては柱痕が検出された。

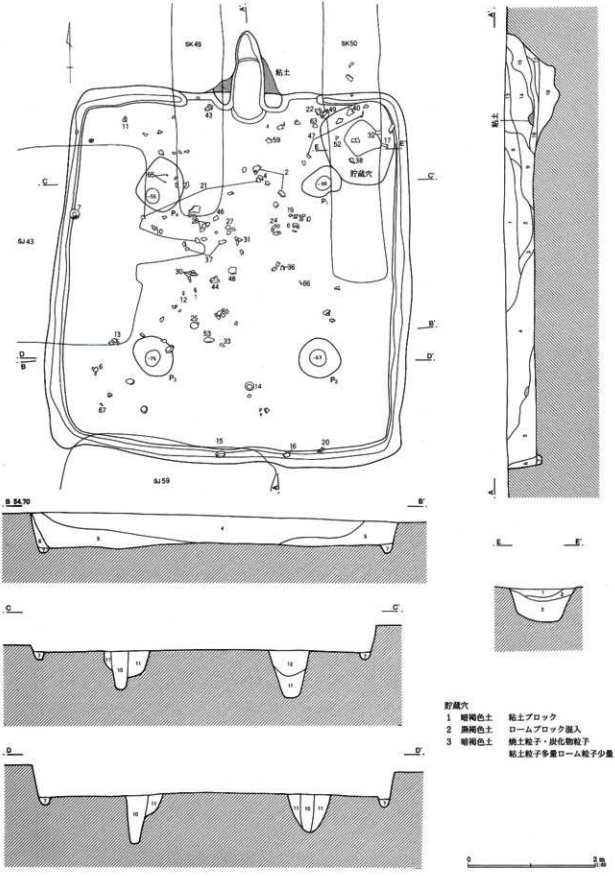
貯蔵穴はカマド右脇の北東コーナーに設置されていた。不整方形プランで、長径1.32m、短径1.14m、深さ0.54mである。

壁溝はカマドの周囲を除き全周する。深さは5～10cmほどである。

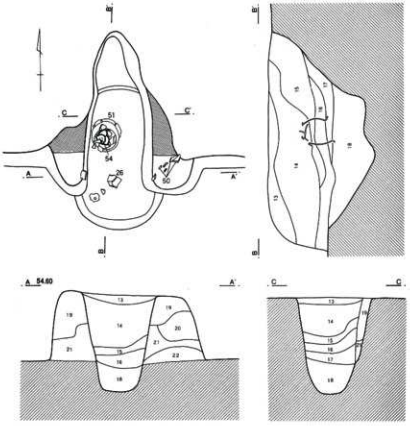
出土遺物は比較的多いが、大半は覆土から出土したものである。器種としては、土師器坏・暗文坏・甕・台付甕・壺・ミニチュア土器、須恵器坏・皿・蓋・高盤？・円面硯・甕、竈形土製品？、土錘、鉄製刀子がある（第100～103図）。第100図1～5は須恵器蓋。2は端部の屈曲が強く、稜椀の蓋と思われる。6～12は須恵器坏で、いずれも底部は回転糸切り後再調整している。6・7は床面出土。6は南比企産で底部は回転糸切り後周辺部を回転ヘラケズリ調整。ヘラ記号が見える。7は末野産。底部は回転糸切り後、周辺部及び体部下端を回転ヘラケズリしているが、乾燥状態で行ったためにノッキングを起こしている。13の須恵器皿は混入。重複する第43号住居跡に帰属するものと考えられる。

14～32は土師器坏。やや扁平な丸底を呈するもの（14～17・25～27など）と平底風に仕上げるもの（20・22・28）がある。30～32は大型品である。15は完形で、南壁に貼りつくような状態で出土した。33～40は暗文坏。34～36は浅身のタイプ、37～40は深身である。内面に放射十ラセン暗文の施文を基本とするが、見込部が磨滅して、螺旋暗文の有無が不明瞭なものもある（34・36）。33の外面には墨書が記されている。「廾」か。41は須恵器壺蓋。天井部外面

第99図　A区第60号住居跡

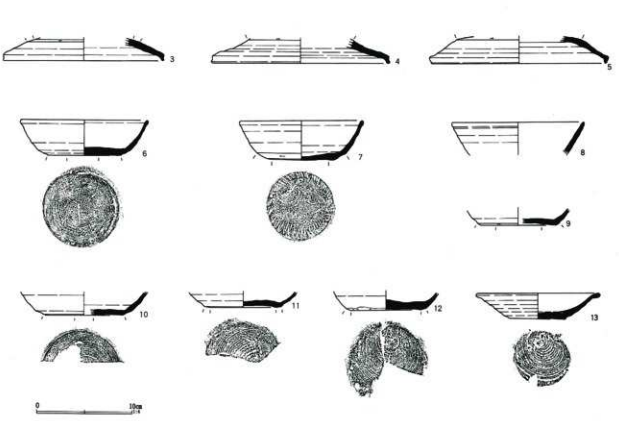


第100図　A区第60号住居跡カマド・出土遺物(1)

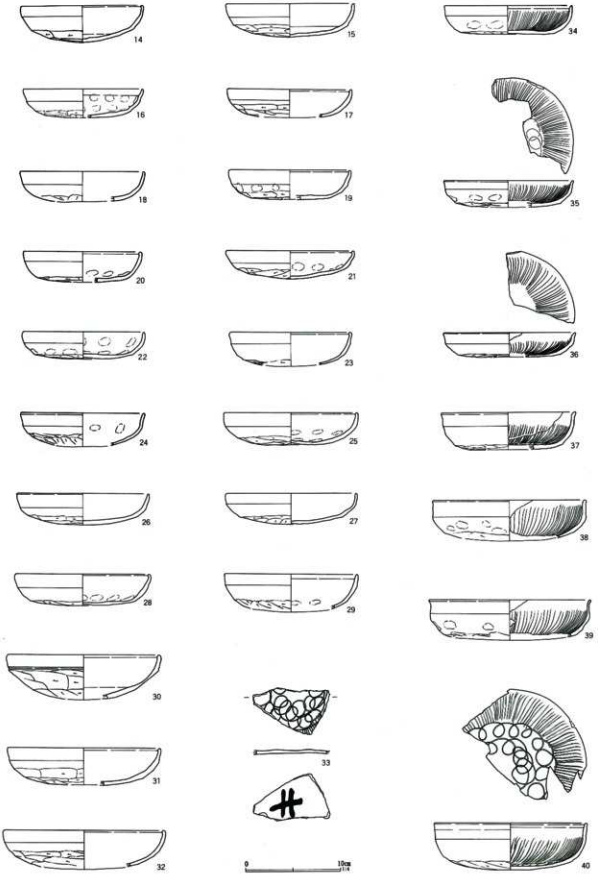


SJ60

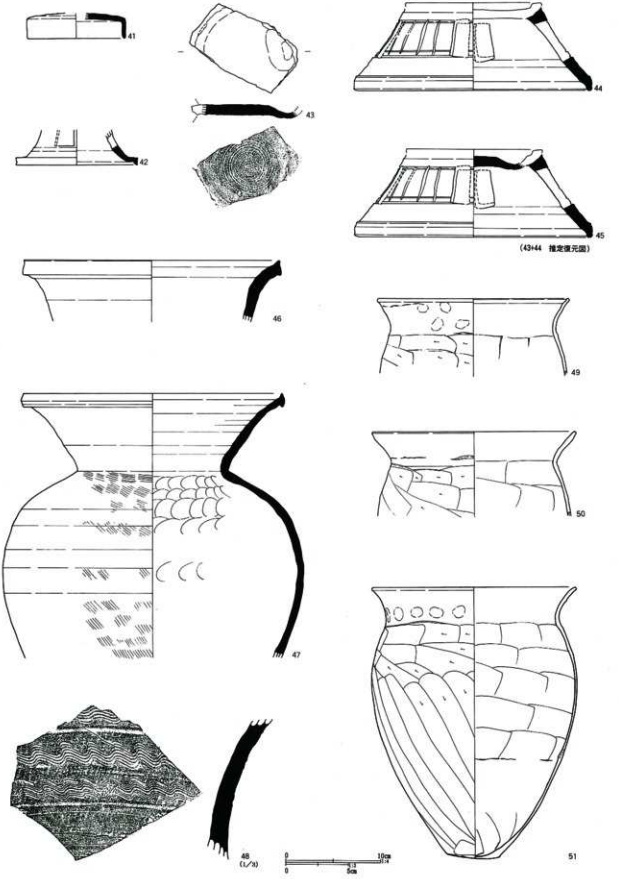
1	暗褐色土	焼土粒子・ローム粒子少量
2	暗褐色土	焼土粒子・ローム粒子少量
3	暗褐色土	焼土粒子・ローム粒子 炭化物粒子少量
4	暗褐色土	ロームブロック多量
5	暗褐色土	ローム粒子・焼土粒子少量
6	暗褐色土	ローム粒子・ロームブロック混入
7	明褐色土	ローム粒子多量
8	暗灰褐色土	焼土粒子多量。ローム粒子少量
9	暗灰褐色土	焼土粒子・炭化物粒子少量
10	明褐色土	灰色粘土混入。焼土粒子少量
11	暗褐色土	焼土粒子・ローム粒子 炭化物粒子少量
12	暗褐色土	焼土粒子・ローム粒子・炭化物混入
13	暗褐色土	ローム粒子・焼土粒子少量
14	灰色粘土層	焼土粒子・ローム粒子少量
15	黒褐色土	焼土粒子・焼土ブロック多量
16	炭化物層	
17	黒褐色土	ロームブロック多量
18	黒褐色土	灰褐色粘土混入。焼土粒子 ローム粒子少量(掘り方)
19	暗褐色土	焼土粒子・ローム粒子少量
20	灰色粘土	ローム粒子少量
21	灰色粘土	焼土粒子・ローム粒子少量
22	黒褐色土	ローム粒子多量



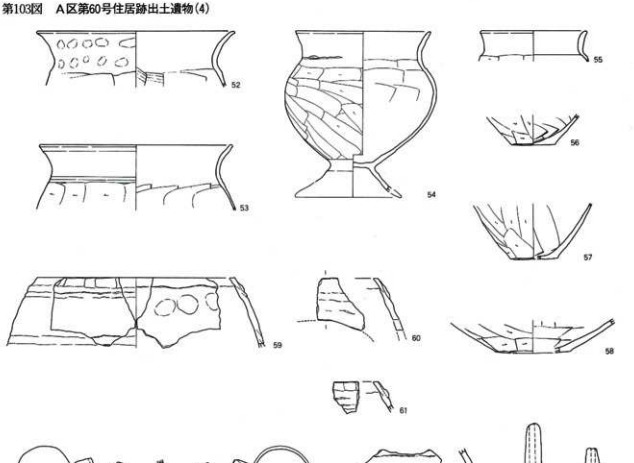
第101図　A区第60号住居跡出土遺物(2)



第102図　A区第60号住居跡出土遺物(3)



第103図　A区第60号住居跡出土遺物(4)



にくすんだ緑色の自然釉が掛かる。胎土は緻密で搬入品（東海産？）と思われる。42は高盤脚部に復元したが不明確。方形透が入る。43・44は円面硯である。胎土が酷似し、接合しないが同一個体の可能性がある。43は硯面の破片で、表面は摩耗し光沢を帯びる。硯面の一隅を窪ませ、墨溜め（海）を作り出すという特徴的な技法が認められる。裏面はカキ目。44は円面硯脚部片。方形透と沈線4（十α）条からなる装飾を加えているが単位は不明。45は43と44を組み合わせた推定復元図を示した。46～49は須恵器甕。47は接合しない破片を合成図化した。南比企産。49～53は土師器甕。51はカマド内から伏せた状態で出土した。54の台付甕は51の甕の上に、やはり伏せた状態で重ねられていた。59～63は焼きや色調から同一個体の破片と判断した。口縁部付近は粘土紐接合痕を残す（59～61）。62・63は胴部片と思われ、62には弧状に切り取られた孔が穿たれている。通常の土器とは明らかに異なり、ここでは竈形土製品の一部と判断した。64はミニチュア土器。体部下端はヘラケズリ、内面ヘラナデ。65は刀子片。切先と柄部先端を欠く。

須恵器は破片数で371片出土した。内訳は坏が236点（末野産180・南比企産56）、椀が1点（南比企）、高台椀が7点（末野）、皿が1点（末野）、蓋が50点

第47表　A区第60号住居跡出土遺物観察表（第100～103図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵蓋		1.6		D片	B	灰褐色	40%	№18。覆土中層。末野産。つまみ完存
2	須恵蓋	(18.0)	3.5		片	A	灰色	50%	№96･100。覆土中層。稜椀蓋。末野産
3	須恵蓋	(16.8)	2.4		C片	B	灰褐色	10%	覆土。末野産
4	須恵蓋	(18.6)	2.6		BD片	B	灰褐色	15%	№99。覆土中層。末野産
5	須恵蓋	(18.4)	2.8		C片	C	灰褐色	15%	上層。末野産
6	須恵坏	(13.3)	3.7	7.8	B針	A	暗青灰色	45%	№5。床面。南比企産。底部B3b手法
7	須恵坏	12.9	3.7	7.2	C片	A	青灰色	95%	№3。床面。末野産。底部B3d手法
8	須恵坏	(13.9)	3.5		片	A	暗灰色	30%	貯蔵穴。覆土。末野産
9	須恵坏		1.8	(8.0)	D片	B	黄褐色	30%	上層。末野産
10	須恵坏		2.4	(8.0)	C針	C	淡黄灰色	30%	№23。覆土下層。南比企産。底部B3b手法
11	須恵坏		1.6	8.0	C片	D	黄灰色	30%	№35。床面。末野産。底部B3b手法か
12	須恵坏		2.0	7.4	AC	C	淡黄灰色	75%	№17。覆土中層。末野産。底部B2b手法
13	須恵皿	12.8	2.8	6.0	C片	A	暗青灰色	80%	№4。末野産。底部B0手法。SJ43に帰属
14	土師坏	12.7	3.8		AB	A	褐色	95%	№69。覆土下層。
15	土師坏	13.4	3.5		A	B	橙褐色	100%	№73。覆土下層
16	土師坏	(12.6)	3.0		AB	A	淡褐色	30%	№74。床面
17	土師坏	(16.0)	3.9		AB	B	暗褐色	20%	№123。貯蔵穴内
18	土師坏	(13.0)	3.1		AB	A	褐色	15%	貯蔵穴十覆土
19	土師坏	(12.6)	3.1		BG	A	褐色	20%	№88。覆土上層
20	土師坏	(12.3)	3.2		AB	B	橙褐色	50%	№75。床面
21	土師坏	13.4	2.9		AD	B	茶褐色	40%	№25･98。覆土下層十中層
22	土師坏	(12.8)	2.9		AB	A	橙褐色	30%	№109。覆土中層
23	土師坏	(12.6)	3.4		BD	A	橙褐色	25%	覆土上層
24	土師坏	(13.0)	3.4		AB	A	橙褐色	30%	№83。覆土下層
25	土師坏	(14.0)	3.4		AB	A	黄褐色	55%	№65。覆土下層
26	土師坏	(13.8)	3.3		AB	A	淡褐色	25%	№126，カマド内
27	土師坏	(13.7)	3.2		AB	A	橙褐色	25%	№54。覆土中層
28	土師坏	(14.0)	3.3		ABD	B	褐色	25%	№47･48。覆土中層
29	土師坏	(14.0)	3.7		DG	A	淡褐色	20%	覆土
30	土師坏	(16.0)	4.6		BG	A	褐色	25%	№19・20。覆土下層
31	土師坏	13.0	2.9		AB	A	褐色	40%	№57。覆土下層
32	土師坏	(16.8)	3.8		BC	A	褐色	15%	№120。貯蔵穴内
33	土師暗文坏				A	A	明褐色		№67。覆土上層。内面ラセン十放射暗文、外面墨書「廾」
34	土師暗文坏	13.4	3.0	9.9	AC	A	明褐色	75%	貯蔵穴。見込部磨滅
35	土師暗文坏	(13.6)	2.8	(11.0)	AB	B	褐色	30%	貯蔵穴。内面放射暗文十ラセン暗文
36	土師暗文坏	(13.8)	2.5	(10.9)	AB	A	褐色	25%	№77。覆土上層。中心部暗文不明瞭
37	土師暗文坏	(14.0)	3.9		AB	A	茶褐色	20%	№21･52。床面十覆土下層。内面ラセン十放射暗文
38	土師暗文坏	(16.0)	3.9		BG	A	明褐色	15%	№125。貯蔵穴内。内面放射暗文
39	土師暗文坏	(17.0)	3.9	(14.0)	B	A	明褐色	15%	覆土十Pit2掘り方。内面放射暗文
40	土師暗文坏	(16.0)	4.9		AB	A	茶褐色	35%	№112。覆土下層
41	須恵蓋	(10.2)	2.6		B	A	灰色	15%	覆土。東海産か。天井部緑灰色の自然釉
42	須恵高盤		3.7	(12.8)	BC	B	黄灰色	10%	覆土上層。末野産か。透孔単位は不明
43	須恵円面硯				C	A	青灰色		№40。覆土下層。末野産か。墨溜状の凹みあり
44	須恵円面硯		8.7	(24.3)	C片？	A	灰色	30%	№61。覆土下層。末野産か。方形透し十沈線加飾
45	須恵円面硯					A	暗青灰色	20%	43･44の復元図
46	須恵甕	(27.0)	6.4		片	A	青灰色	20%	№45。覆土下層。末野産
47	須恵甕	(27.5)	27.7		C針	A	暗灰色	15%	№106･113。床面十覆土下層。南比企産。復元図化
48	須恵甕				片	A	青灰色		№60。覆土下層。末野産。8本1組の櫛描波状文十沈線
49	土師甕	(20.0)	8.1		AB	B	褐色	25%	№111。覆土下層
50	土師甕	(21.4)	8.9		AB	A	褐色	40%	№130･135他。カマド内
51	土師甕	21.3	28.5	5.4	AB	B	褐色	80%	№134。カマド内
52	土師甕	(20.8)	5.9		AH	B	褐色	15%	№124。貯蔵穴内
53	土師甕	(20.0)	6.9		AB	A	褐色	40%	№66。覆土中層

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
54	土師小型台付甕	14.1	16.8		AB	B	褐色	75%	№133。カマド内。№51の上部に重なる
55	土師小型台付甕	(11.0)	3.2		A	B	暗褐色	25%	貯蔵穴
56	土師甕		3.1	4.6	AB	A	褐色	70%	カマド内
57	土師甕		5.9	5.0	AB	B	黄褐色	25%	カマド内
58	土師壺		3.6	(8.0)	GH	A	褐色	20%	覆土
59	磨形土製品	№101。覆土下層。口径(21.0)cm。高さ7.2cm。胎土ABG。焼成A。褐色。残存10%。掛口内径約20cm							
60	磨形土製品	覆土。胎土ABDG。焼成A。淡褐色							
61	磨形土製品	覆土上層。胎土ABG。焼成A。褐色。掛口部片　口縁直下に粘土貼付　外面ﾀﾃﾅﾃﾞ十ﾅﾃﾞ　内面横方向のﾅﾃﾞ							
62	磨形土製品	カマド覆土。胎土AB。焼成A。褐色。二次火熱(?)のため器表やや脆弱　側面に円形の孔が穿たれる							
63	磨形土製品	№108。覆土下層。胎土ABG。焼成A。褐色。胴部片　外面接合痕残り雑なﾅﾃﾞ　内面ﾛ方向の丁寧なﾅﾃﾞ							
64	ミニチュア土器		3.1	(5.2)	AB	A	淡褐色	30%	覆土上層。壺？黒底あり
65	刀子	№29・30。覆土下層。残長9.0cm。切先、柄部先端欠失							
66	土錘	№76。覆土上層。長さ6.5cm。最大径1.3cm。孔径0.5cm。重さ11.18g。胎土D。焼成B。褐色							
67	土錘	№9。覆土下層。長さ4.4cm。最大径1.4cm。孔径0.3～0.5cm。重さ6.29g。胎土A。焼成B。褐色							

(末野49・東海産1)、高盤1点(末野)、壺瓶類12点(末野5・南比企6・不明1)、甕56点(末野51・南比企5)、円面硯7点(末野)である。住居の時期は熊野Ⅲ期、そのなかでも後半中心と考えられる。

A区第61号住居跡(第104図)

A区第61号住居跡は45・46－10グリッドに位置し、遺構密集地帯の一角にある。多数の遺構と重複しており、遺構の遺存状態は悪い。重複遺構との新旧関係は、第48・62号住居跡を切り、第50号住居跡、第11号溝跡、第46・47・52・65・68号土壙に切られていた。平面形は方形系と推定されるが、南壁部と西壁を確定することはできなかった。残存規模は長軸長4.02m、短軸長3.98m、深さ0.25mである。主軸方位はN－112°－Eを指す。

床面はやや凹凸が顕著であった。埋土は多量の焼土粒子と少量の白色粘土ブロック混じりの褐色土を基調としていた。自然堆積か否かの判断はできなかった。

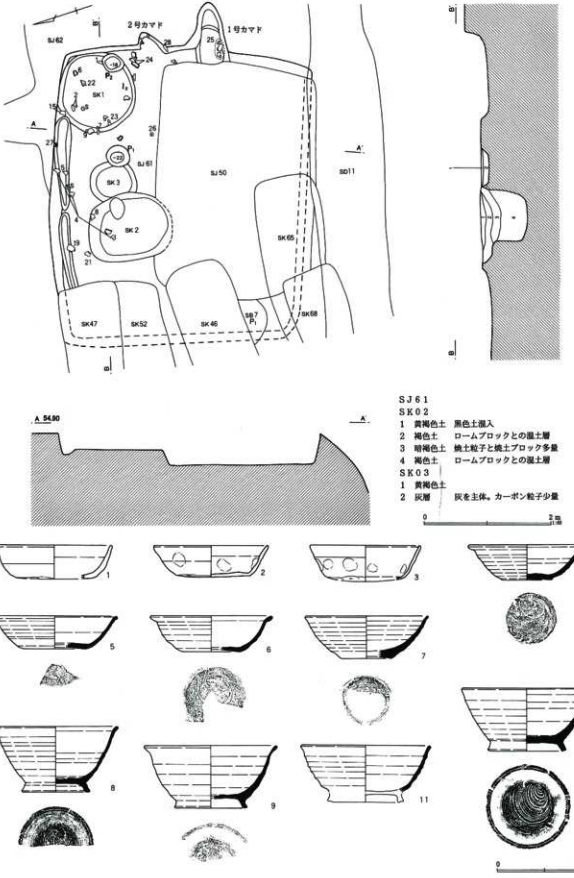
カマドは東壁に2基設置されていた。遺存状態から2号カマドから1号カマドに付け替えられたものと考えられる。1号カマドは南側にあり、燃焼部は壁を切り込んで構築されている。袖部と焚口部は第50号住居跡に削平されていた。袖部には白色粘土塊が僅かに残存していたが、詳細は不明である。埋土には焼土ブロックが多量に含まれていた。2号カマドは壁を切り込んでいるが、掘り込みが浅いために上面が削平されており、詳細は不明である。埋土は白色粘土と焼土ブロック混じりの天井部崩落土が認められた。底面には床層に相当する炭化物・灰混じりの暗褐色土が堆積していた。

ピットは2本検出されたが、遺構に伴うものではない。土壙は3基検出された。SK1・3は掘り方と思われる。SK2は床下土壙か。

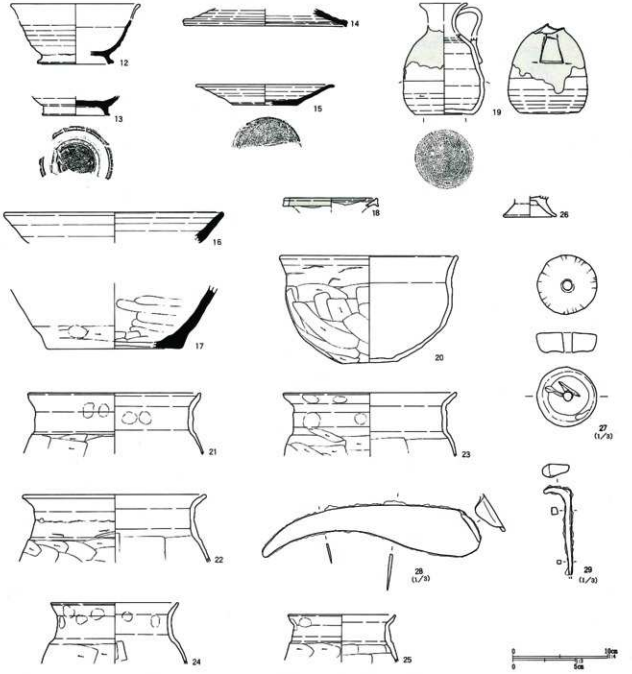
壁溝は北壁際に巡っていた。

出土遺物は土師器坏・甕・台付甕・鉢、須恵器坏・高台椀・蓋・皿・盤・甕・灰釉長頸瓶・灰釉陶器手付小瓶、石製紡錘車、鉄製鎌・釘がある(第104・105図)。1～3は土師器坏。底部は平底で、厚手の1と薄手で粗製の2・3がある。4～7は須恵器坏。いずれも末野産。底部は回転糸切り後無調整で、底径は口径の1/2以下である。8～13は須恵器高台椀で、口径は13cm代。14は須恵器蓋。15は須恵器皿。体部は直線的に延び、口縁部が外反する。16は盤で混入であろう。17は甕。18は灰釉陶器長頸瓶。薄手でシャープなつくりである。産地不明。19は灰釉陶器手付小瓶。口縁部を欠くが優品である。黄緑色の釉が胴部中位まで厚く掛かる。底部は回転糸切り後、周辺部と胴部下位まで回転ヘラケズリ調整を施している。把手は粘土板貼付後に、周囲をヘラで面取りしており、器面にヘラ傷が残る。胎土は灰白色で、砂粒を若干含む。猿投産、K－90古段階に比定される。20は土師器鉢。21～23は「コ」の字状口縁甕。24・25

第104図　A区第61号住居跡・出土遺物(1)



第105図　A区第61号住居跡出土遺物(2)



は小型甕、おそらく台付甕であろう。26は台付甕脚部と思われるが、非常に小型である。27は石製紡錘車。ヘラ傷が付いている。28は鉄鎌。基部上隅を内側に折り返している。ほぼ完存し、長さ17.2cm。29は鉄釘。頭部はやや細長く、茎部は断面方形。

須恵器は198片出土し、内訳は坏が137点（末野産120・南比企産17）、高台椀10点、皿7点、甕27点、蓋10点、壺瓶類6点、盤1点（いずれも末野）である。時期は熊野Ⅵ期と考えられる。

A区第62号住居跡（第106・107図）

A区第62号住居跡は45・46ー10・11グリッドに位置する。多数の遺構と重複し、遺存状況はあまり良くない。新旧関係は第63・64号住居跡を切り、第50・61号住居跡、第41号掘立柱建物跡、第11号溝跡、第46・47・52・65号土壙に切られていた。平面形は方形と推定され、規模は長軸長6.60m、短軸長6.00m、

第48表　A区第61号住居跡出土遺物観察表（第104・105図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	(12.0)	3.5		ABC	A	褐色	20%	№22。覆土上層
2	土師坏	12.0	3.3		ABCD	B	褐色	95%	№17・18。覆土下層。内外面指押圧痕あり
3	土師坏	(11.5)	3.6		ABCD	A	褐色	25%	覆土。内外面とも指圧痕あり
4	須恵坏	12.1	3.7	5.4	ABC片	A	灰色	95%	№3・6・10。覆土上～下層。末野産。底部B0手法
5	須恵坏	(13.0)	3.5	6.5	BCD片	B	茶褐色	15%	№9。壁溝。末野産。底部B0手法
6	須恵坏	12.7	3.7	6.2	BC片	B	灰色	40%	№21。覆土下層。末野産。底部B0手法
7	須恵坏	13.0	4.5	(5.0)	BCD片	B	灰褐色	35%	№14。床面。末野産。底部B0手法。糸切り面2枚
8	須恵高台椀	(13.0)	6.9	7.0	BCE片	B	灰色	30%	№4。覆土。末野産。底部B0手法。高台貼り付け
9	須恵高台椀	(13.9)	6.6	7.5	BCD片	D	淡褐色	45%	№12。床面。末野産。底部B0手法。高台貼り付け
10	須恵高台椀	(13.5)	6.6	7.5	BCE片	A	灰色	50%	覆土十確認面。末野産。底部B0手法。高台貼り付け
11	須恵高台椀	(13.4)	5.0		B片	A	暗青灰色	20%	覆土。末野産
12	須恵高台椀		4.6	7.0	C片	B	灰色	35%	覆土。末野産。底部B0手法。高台貼付
13	須恵高台坏		2.0	6.9	BC片	A	灰色	50%	SK2覆土。末野産。底部B0手法。高台貼り付け
14	須恵蓋	17.0	1.8		BCD片	A	灰色	5%	覆土。末野産
15	須恵皿	(14.3)	2.1	7.0	BC片	A	灰色	40%	№19。覆土中層。末野産。底部B0手法。糸切り面2枚
16	須恵盤	(23.0)	3.2		BCD片	A	暗青灰色	5%	覆土。末野産
17	須恵甕		6.4	14.0	BC片	B	黄灰色	15%	覆土。末野産。体部下端部ヘラケズリ十指押え
18	灰釉長頸瓶	(9.6)	1.0		BCF	A	灰色	5%	覆土。産地不明。薄くてシャープなつくり
19	灰釉手付小瓶		9.5	6.2	BF	A	灰白色	100%	No8。覆土下層。猿投産。灰釉薄黄緑色で厚い
20	土師鉢	18.4	11.4	6.0	ABCD	A	褐色	90%	SK02覆土
21	土師甕	(18.0)	6.4		ABC	A	淡褐色	10%	№7。覆土下層
22	土師甕	19.0	7.1		ABCD	A	明褐色	20%	№20。床面
23	土師甕	(18.2)	6.7		ABCD	A	褐色	15%	№15。床面
24	土師小型甕	13.3	6.4		ABCD	A	褐色	30%	№27。覆土下層
25	土師小型甕	(11.3)	5.0		ABCD	A	褐色	25%	カマドNo1
26	土師台付甕		2.2	5.4	ABCD	A	褐色	95%	No31。床面。ミニチュア？
27	石製紡錘車	No11。壁際覆土上層。最大径4.8cm。高さ1.5cm。重さ40.46g。残存100%。凝灰岩製							
28	鉄鎌	2号カマドNo3。残長17.2cm。幅3.6cm。基部右上を折り返す							
29	鉄釘	SK02。残長7.0cm。							

深さ0.20mである。主軸方位はN－5°－Eを指す。

床面は住居北東部が遺存するのみである。概ね平坦で堅く締まっていたが、第63号住居跡と重複する東壁際はやや軟弱であった。埋土はローム粒子と焼土粒子を多量に含む褐色土を基調としていた。埋没過程は不明確である。

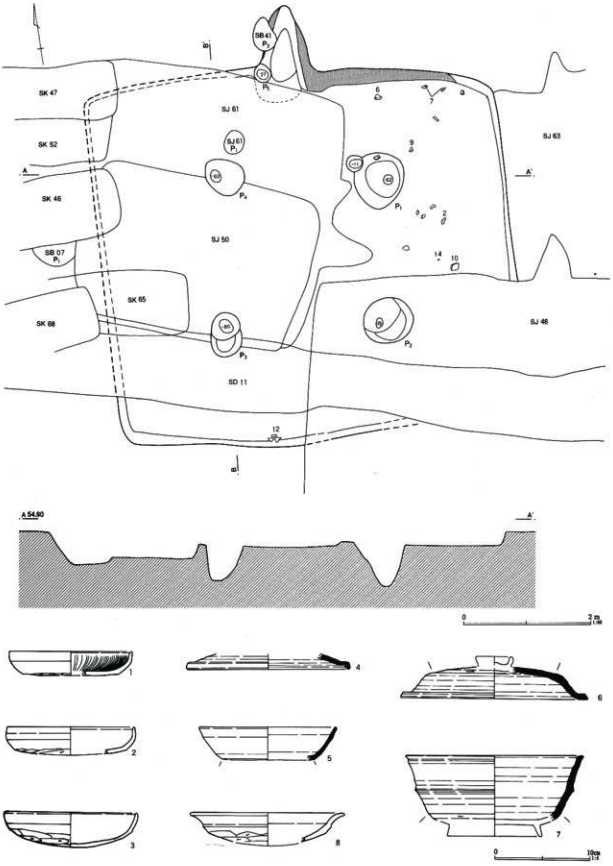
カマドは北壁のほぼ中央に設置される。燃焼部は壁を切り込んでおり、両側壁には粘土が貼り込んであった。また、カマド東側の北壁際には白色粘土が壁に沿って貼り込み、その内側にローム質土をやはり貼り込んだ状況が観察された。壁を保護するための貼壁と考えられる。燃焼部側壁の内側は強く被熱していたが、左側のそれは第41号掘立柱建物跡柱穴とPit5に破壊されていた。埋土は第1～3層が天井部崩落土、第4層が灰層、第8層は掘り方埋土と考えられる。左袖は第61号住居跡に削平され、遺存状態は悪く、灰白色粘土が僅かに遺存するのみであった。右袖内からは土師器甕が倒立状態で埋め込まれており、袖の補強材として使用されていた。

ピットは5本検出された。Pit1～4は規則的に配置され、主柱穴と考えられる。Pit5は遺構に伴うものではない。貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。

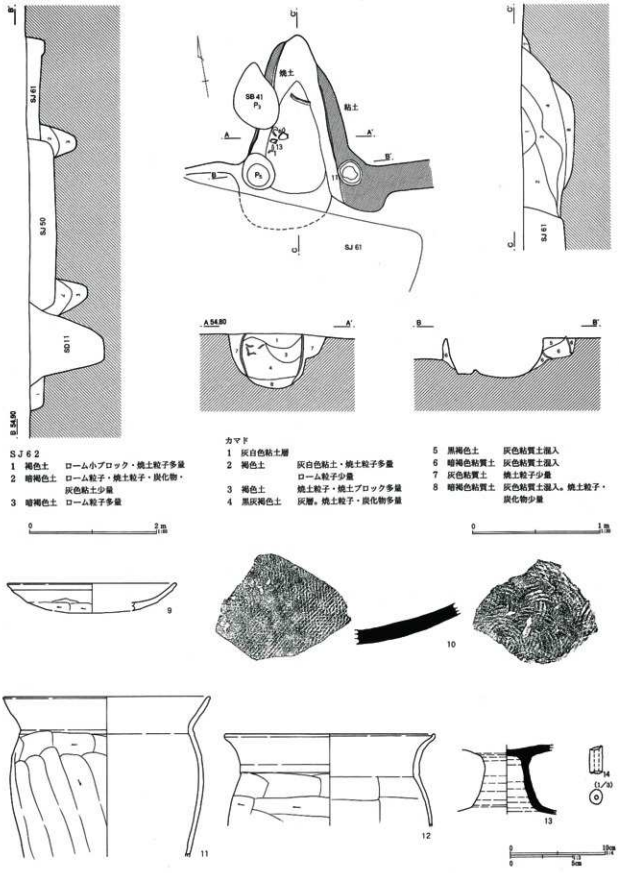
出土遺物は土師器坏・暗文坏・Ⅲ・甕、須恵器坏・蓋・稜椀・高盤・甕、土錘がある（第106・107図）。

1は土師器平底暗文坏である。扁平な器形で、内面に放射状暗文が施文される。見込部にはおそらく螺旋暗文が施文されたものと思われるが、判然としない。2・3は土師器坏。2は平底風、3は弱い丸底である。4は須恵器蓋。5は須恵器坏で、底部は回転ヘラケズリされる。推定口径14.4cmで、胎土に

第106図　A区第62号住居跡・出土遺物(1)



第107図　A区第62号住居跡・出土遺物(2)



第49表　A区第62号住居跡出土遺物観察表（第106・107図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師暗文坏	13.0	2.5	10.2	ABCD	A	褐色	30%	カマド内№16。内面放射暗文
2	土師坏	(13.5)	2.8		ABCD	A	淡褐色	25%	№10。覆土中層
3	土師坏	14.0	3.7		ABCD	A	淡褐色	70%	SJ61・62覆土
4	須恵蓋	17.0	1.7		B針	A	灰色	20%	覆土。南比企産
5	須恵坏	14.4	3.5	9.2	BC	A	灰白色	25%	覆土。やや砂っぽい。南比企産？底部回転ヘラケズリ
6	須恵蓋	19.8	3.3		BCD片	B	灰褐色	20%	№13。覆土下層。末野産。佐波理模倣椀の蓋
7	須恵稜椀	(18.6)	6.7		BCD片	A	灰褐色	30%	№1・2。覆土中・下層。末野産
8	土師皿	(16.0)	3.0		ABC	A	褐色	10%	覆土
9	土師皿	(17.8)	2.9		ABCD	A	褐色	10%	№6。覆土中層
10	須恵甕				ABC片	B	灰褐色		№11。覆土中層。末野産。外面平行叩き、内面同心円当具
11	土師甕	21.8	16.8		ABCD	A	明褐色	40%	カマド内№2。右袖内
12	土師甕	22.0	9.7		ABCD	A	褐色	30%	№17。覆土中層
13	須恵高盤		7.3		BCD片	A	灰色	75%	カマド内No4。末野産
14	土錘	№12。覆土中層。長さ2.2cm。最大径1.0cm。孔径0.3cm。重さ3.22g。胎土ABC							

白色針状物質は含まれないが、南比企産に似る。6・7は末野産の稜椀（佐波理模倣椀）とその蓋で、胎土や焼きが酷似し、本来セット関係にあったものと考えられる。7は椀身で底部を欠くが、推定口径18.6cmと大振りで、体部中央に高い稜が巡る。口唇部は面取りされる。重複する第48号住居跡に、同一個体と思われる破片が出土している（第80図12）。6は蓋で、つまみを欠くが、第60号住居跡出土例を参考にすると、小さい環状つまみが付くであろう。天井部の形態と口縁部の屈曲が特徴的である。8・9は土師器Ⅲ。11はカマド袖に埋め込まれた土師器甕。弱いくの字状口縁で、胴部の張りは弱い。13はカマド内から出土した高盤脚部。透かしはない。

須恵器は71片出土し、内訳は坏が39点（末野産31・南比企産8）、椀が2点（南比企）、高台椀4点（末野）、蓋9点（末野7・南比企2）、壺瓶類2点（末野）、盤1点（末野）、高盤1点（末野）、甕13点（末野）である。

時期は熊野Ⅲ期古相と考えられ、重複する第48号住居跡とほぼ同一段階である。第47号住居跡も含めると62→48→47号住居跡に連続して建て替えられたものと考えられる。

A区第63号住居跡（第108図）

A区第63号住居跡は45・46－11グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は第64号住居跡を切り、第45・48・62号住居跡、第37号掘立柱建物跡、第11号溝跡に切られていた。遺構の遺存状態は極めて悪く、特に南壁部は壁溝が不明瞭になる。平面形は長方形と推定され、規模は長軸長4.38m、短軸長3.78m、深さ0.30～0.40mである。主軸方位はN－5°－Eを指す。

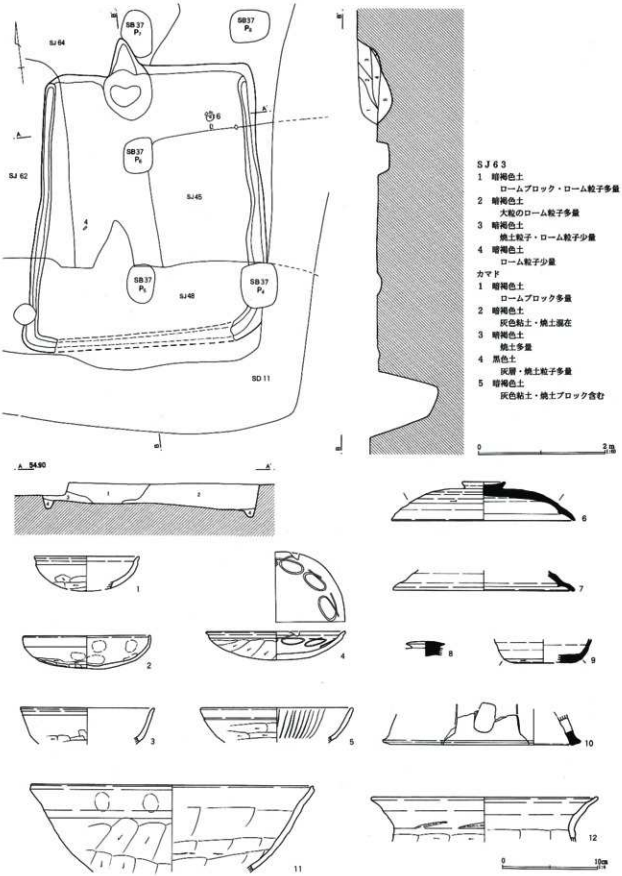
床面は中央部は堅く締まっていたが、東壁部周辺は軟弱で、東に向かって傾斜していた。埋土はロームブロックやローム粒子が多量に含まれ、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

カマドは北壁に設置されていた。燃焼部は壁内にあり、緩やかに立ち上がりながら壁外に延びる煙道部に続く。袖部は粘土が残されておらず、住居廃絶時に取り外された可能性がある。埋土は第1層は住居埋土と同一、第2～3層は天井部崩落土、第4層は灰層に相当する。第5層は掘り方埋土である。

ピット、貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は東壁と西壁部で検出されたが、南壁部は48号住居跡に攪乱され、明確に検出することはできなかった。

出土遺物は少なく、土師器坏・暗文坏・甕・鉢、須恵器坏・蓋が検出された（第108図）。1は暗文坏系の器形であるが、暗文は施されていない。2は扁平丸底の北武蔵型坏。3も暗文坏系無文坏か。4は暗文Ⅲ。内面上位に螺旋状の暗文が施されている。見込部は磨滅しており、暗文の有無は不明。5は暗

第108図　A区第63号住居跡・出土遺物



第50表　A区第63号住居跡出土遺物観察表（第108図）

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　考
1	土師坏	(11.0)	3.5		A B	A	明褐色	15%	覆土。暗文坏系
2	土師坏	(13.3)	3.5		A B C	B	茶褐色	20%	覆土。内面指頭痕あり
3	土師坏	(14.0)	3.8		A	B	黄褐色	15%	カマド。暗文坏系か
4	土師暗文皿	4.7	3.0		A B	A	明褐色	75%	掘り方。内面ラセン暗文
5	土師暗文坏	(16.0)	3.7		A B	A	黄褐色	15%	覆土。内面放射暗文
6	須恵蓋	(19.3)	4.1		B C片	C	黄灰褐色	55%	No.1。床面。末野産
7	須恵蓋	(19.2)	2.1		B	A	灰色	5%	覆土。末野産
8	須恵蓋		1.5		B C片	B	灰色	90%	覆土。つまみ径4.0cm。末野産
9	須恵坏		2.5	(6.0)	B C	A	青灰色	15%	カマド。末野産か。体部下端＋底部回転ヘラケズリ
10	須恵円面硯		3.4	(19.0)	B片	A	灰色	15%	No.4。床面。SJ12と接合。末野産。方形透し＋刻み加飾
11	土師鉢	(29.8)	9.2		A B	B	褐色	15%	掘り方
12	土師甕	(23.8)	4.7		A	B	褐色	20%	掘り方

文坏で、内面に放射暗文が施される。6は大振りの須恵器蓋。焼きはやや甘く、内面にかえりが付く。床面出土。9は小振りの坏。底部は回転ヘラケズリ調整。末野産と思われる。10は円面硯の脚部片。方形（楕円形？）の透かしの左右に沈線による刻みが入る。第12号住居跡出土の円面硯と接合した。実測図は再録。時期は熊野Ⅱ期と考えられる。

A区第64号住居跡（第109図）

A区第64号住居跡は45－10・11グリッドに位置する。第62・63号住居跡、第37・40・41・48号掘立柱建物跡と重複し、本住居跡が最も古い。平面形は方形で、規模は長軸長3.42m、短軸長3.30m、深さ0.25mである。主軸方位はN－60°－Eを指す。

床面は概ね平坦で、カマド前面が非常に堅く踏み固められていた。壁際はやや軟弱である。埋土はローム ブロック混じりの暗褐色土を基調としており、人為的に埋め戻された可能性が高い。

カマドは北東壁の南寄りに設置されていた。燃焼部は壁に掛かる位置にあり、壁外の煙道部に向かい緩やかに立ち上がる。埋土は第2～4層が天井部崩落土、第6層が灰層、7・9層が掘り方埋土であろう。火床面は第7層上面と考えられる。袖部は灰褐色粘質土を積み上げて構築されていた。

ピットは5本検出されたが、いずれも中世段階の所産と考えられる。土壙は1基検出された。深さ50cmで、掘り方、または床下土壙の可能性が高い。

出土遺物は極めて少なく、土師器坏と鉢？が検出されたに留まる（第109図）。1は土師器坏。扁平な器形で底部は弱い丸底風となろうか。2は椀または鉢か。1は第63号住居跡との重複関係からみても混入と思われる。2は伴う可能性はあるが、時期決定は難しい。時期は不明確であるが、おそらく熊野Ⅰ期に遡るものと考えられる。

A区第65号住居跡（第110図）

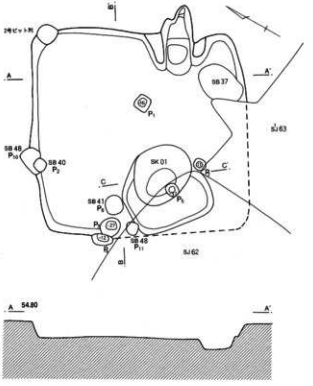
A区第65号住居跡は44－12グリッドに位置する。住居西半は町教育委員会によって既に調査されている。第39号掘立柱建物跡と重複するが、町教育委員会による調査部分であるため、新旧関係は不明である。平面形は縦長の長方形で、規模は長軸長4.32m、短軸長3.04m、深さ0.30mである。主軸方位はN－96°－Eを指す。

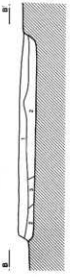
床面は平坦で全体に堅く締まっていた。埋土はローム粒子・焼土粒子混じりの黒褐色土を基調としていた。

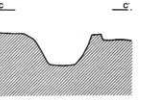
第51表　A区第64号住居跡出土遺物観察表（第109図）

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　考
1	土師坏	(13.0)	2.4		A	A	褐色	15%	覆土
2	土師鉢？	(11.2)	5.4		A C	A	褐色	20%	覆土

第109図　A区第64号住居跡・出土遺物



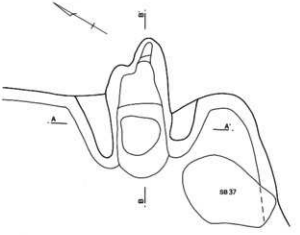


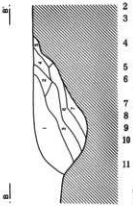


SJ64

1　暗褐色土　ロームブロック・ローム粒子少量
2　暗褐色土　ロームブロック、瘤降状混入
3　黒褐色土　ロームブロック、瘤降状混入

0　2m
1:40

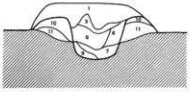


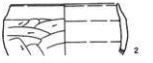


カマド

1　暗褐色土　ロームブロック
2　暗褐色土　ローム粒子・焼土粒子少量
3　褐色土　粘土ブロック焼土粒子やや多量
4　褐色土　粘土ブロック・焼土粒子多量
5　暗褐色土　焼土粒子少量
6　黒褐色土　灰・炭化物粒子焼土粒子混入（灰層）
7　黒褐色土　焼土少量
8　黒褐色土　焼土微量
9　暗褐色土　ロームブロック多量
10　暗灰褐色粘質土　ローム粒子・ブロック少量
11　暗灰褐色粘質土

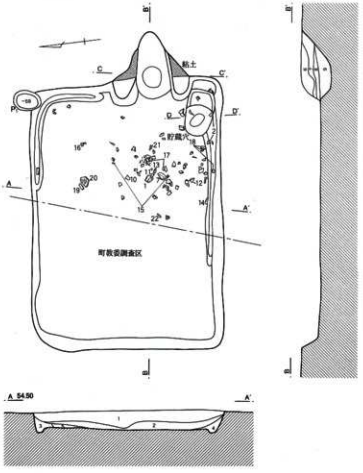
0　1m
1:20





0　10cm
1:4

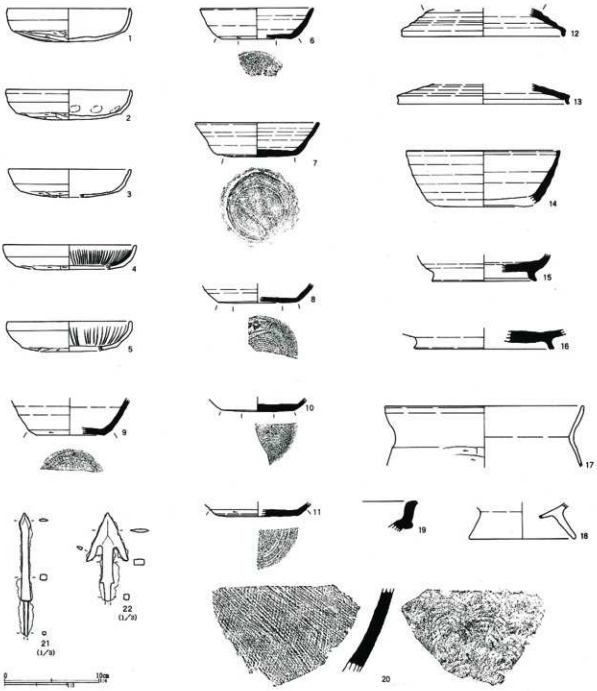
第110図　A区第65号住居跡



第52表　A区第65号住居跡出土遺物観察表（第111図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	(13.0)	3.5		AG	A	褐色	50%	№59。覆土上層
2	土師坏	(13.2)	3.1		AB	B	褐色	25%	№26・27。覆土下層
3	土師坏	(12.8)	2.9		A	A	褐色	10%	覆土
4	土師暗文坏	(14.0)	2.5		A	B	茶褐色	20%	覆土。内面放射暗文
5	土師暗文坏	(13.0)	3.1		AD	A	茶褐色	20%	覆土。内面放射暗文
6	須恵坏	(11.9)	3.2	(7.2)	C片	B	灰色	30%	カマド＋貯蔵穴。末野産。底部B3d手法
7	須恵坏	12.9	3.6	8.2	D片	B	褐色	70%	№64。覆土下層。末野産。底部3a手法
8	須恵坏		2.0	(8.4)	B針	A	明灰色	25%	覆土。南比企産
9	須恵坏		3.9	(7.2)	C小櫛	B	黄灰白色	20%	カマド確認面。群馬産か。底部3c手法
10	須恵坏		1.5	(7.6)	B針	A	明灰色	20%	№13。覆土上層。南比企産。底部B3b手法
11	須恵坏		1.5	(8.4)	BCD片	B	紫灰色	25%	№77。覆土下層。末野産。底部B3c手法
12	須恵蓋	(17.0)	2.9		C片	B	灰色	25%	№38。覆土中層。末野産
13	須恵蓋	(18.0)	2.1		CD片	C	黄灰色	15%	№61。覆土中層。末野産
14	須恵椀	(16.0)	5.6		C針	B	灰色	25%	№37。覆土下層。南比企産。
15	須恵高台椀		2.8	(10.8)	BCD	A	青灰色	35%	№15・65。覆土下層。末野産。底部3a手法
16	須恵高台盤		2.0	(14.0)	CD	B	灰褐色	20%	№7。覆土中層。末野産か
17	土師甕	(21.0)	6.5		ABD	B	茶褐色	25%	№50・62。覆土中層
18	土師台付甕		3.8	11.0	AB	A	明褐色	80%	№28・29他。覆土中層
19	須恵甕？	(48.0)	3.2		BC	A	暗青灰色	5%	№10。覆土中層。末野産か
20	須恵甕				片	B	紫灰色		№9。覆土中層。末野産
21	鉄鏃	№1。覆土下層。残長9.8cm。茎部先端欠失。さび著しく形状推定							
22	鉄鏃	№2。覆土上面。残長6.9cm。両丸造腸抉関箆被三角形形式							

第111図　A区第65号住居跡出土遺物



カマドは東壁に設置される。燃焼部は壁を切り込み、底面は皿状に窪んでいる。側壁上部は部分的に被熱していた。埋土は第6・7・10層が天井部崩落土、第8層が灰層である。袖は白色粘土を積み上げて構築されているが、遺存状態はあまり良くない。ピットは1基、北東コーナーに掛かって検出されたが、本住居に伴うものではない。

貯蔵穴はカマド右脇の南東コーナー部に設けられていた。楕円形プランで長径72cm、底部は二段に掘り込まれていた。深さは15cm。

出土遺物は土師器坏・暗文坏・甕、須恵器坏・蓋・高台椀・高台盤・甕、鉄鎌がある（第111図）。遺物は全て破片で、床面よりも浮いて出土したものが大半である。おそらく埋没過程で投棄されたものと推

定される。

1～3は土師器坏。底部はやや丸底風で、体部から口縁部は内彎気味に開く。4・5は平底暗文坏。6～11は須恵坏。6は口径11.9㎝とやや小振りで、底部は回転糸切り後、周辺部が回転ヘラケズリ調整される。7は口径12.9㎝で、底部は全面回転ヘラケズリ調整される。切り離しは糸によるものであろう。他の土器も底部はヘラによる再調整が施されている。産地は6・7・11が末野産、8・10は南比企産、9は素地土は精良で粉っぽい。小礫の含有が多く、末野や南比企の胎土とは異なり、群馬産の可能性がある。12・13は末野産の無かえり蓋。椀蓋か。14は南比企産の無台椀、15は末野産の高台椀である。16は高台盤か。底部外面は回転ヘラケズリ調整される。17は土師器甕。胴部上位は横方向のヘラケズリ調整。18は台付甕か。19・20は須恵器甕。20は外面擬斜格子叩き、内面同心円当て具痕が残る。21・22は鉄鏃。21は銹化が進み、形状不明確。22は三角形腸抉関箆被である。

須恵器は126片出土し、内訳は坏が67点（末野産48・南比企産17・群馬産？2）、椀が4点（南比企）、高台椀7点（末野6・不明1）、蓋7点（末野5・南比企2）、高台盤3点（末野）、壺瓶類16点（末野）、甕22点（末野）である。時期は熊野Ⅲ期新相～Ⅳ期に掛かる頃と考えられる。

A区第66号住居跡（第112図）

A区第66号住居跡は調査区北東部の38－16グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第39号溝跡を切り、第1号掘立柱建物跡に切られていた。平面形は長方形で、規模は長軸長4.32m、短軸長3.27m、深さ0.45mである。主軸方位はN－36°－Eを指す。

床面は概ね平坦で堅く締まっていた。埋土は、特に第1～3層にロームブロックやローム粒子が多量に含まれ、人為的に埋め戻された可能性が高い。一次堆積土（第6層）については自然堆積とみても良いかもしれない。

カマドは北東壁に設置されていた。燃焼部は壁を切り込んでおり、煙道部は段をもって立ち上がる。

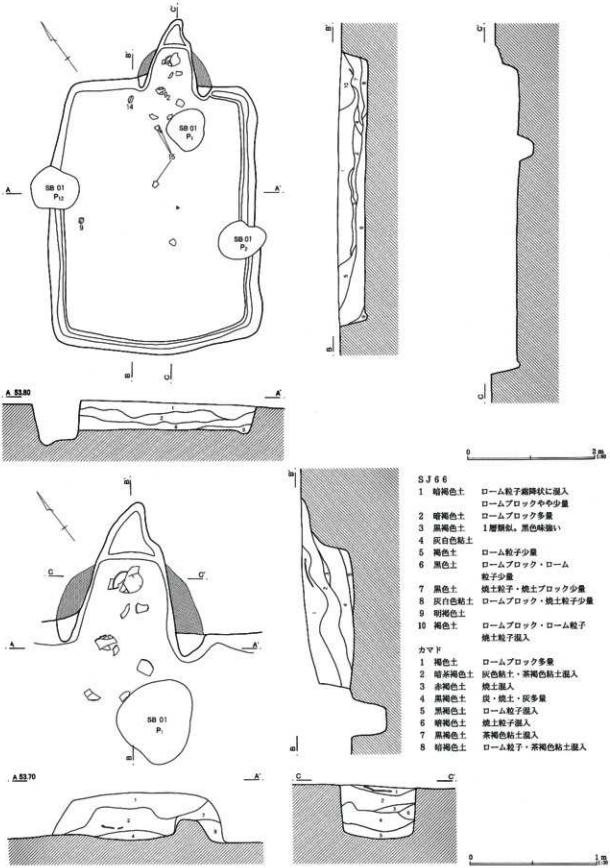
ピットは検出されなかった。壁溝は北コーナー部を除いて巡っていた。

出土遺物は比較的少なく、土師器坏・暗文坏・皿・甕・壺、須恵器坏・蓋がある（第113図）。1～5は土師器坏。3はやや扁平化しているが、他は丸底形態である。6は暗文坏系の坏であるが、内面の暗文は施されない。7は暗文坏。8は皿である。9は須恵器蓋。焼きは良く、内面にかえりをもつ。10はいわゆる坏G。焼きは良く、底部は手持ちヘラケズリ調整。末野または群馬産の可能性が高い。11は大振りの無台坏。体部下端に回転ヘラケズリ痕が見える。

第53表　A区第66号住居跡出土遺物観察表（第113図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	(11.2)	3.5		ABC	A	褐色	30%	カマド内
2	土師坏	(12.0)	3.6		AB	A	褐色	40%	カマド内№7
3	土師坏	(13.0)	3.0		AB	A	茶褐色	45%	カマド内
4	土師坏	(11.0)	2.7		AB	A	橙褐色	15%	覆土
5	土師坏	(13.1)	2.5		AB	A	明褐色	20%	覆土
6	土師坏	(14.0)	2.8		AB	A	赤褐色	15%	覆土。暗文なし
7	土師暗文坏	(12.9)	3.2		AB	A	赤褐色	10%	覆土。内面放射暗文
8	土師皿	(17.2)	2.8		AB	A	褐色	10%	覆土
9	須恵蓋	(14.2)	1.8		B片	A	青灰色	25%	№6。覆土上層。末野産
10	須恵坏	(8.3)	3.0		B	A	青灰色	25%	覆土。末野または群馬産か。底部手持ちヘラケズリ
11	須恵坏	(15.4)	3.4		B片	B	灰色	15%	覆土。末野産
12	土師蓋	(16.2)	6.2		AB	A	褐色	15%	覆土
13	土師甕	(21.0)	6.7		AB	B	暗褐色	10%	覆土
14	土師甕	(21.0)	4.5		AG	A	褐色	15%	№1。覆土中層
15	土師甕	(22.0)	18.6		ABD	B	明褐色	10%	№2・3。覆土中・上層

第112図　A区第66号住居跡



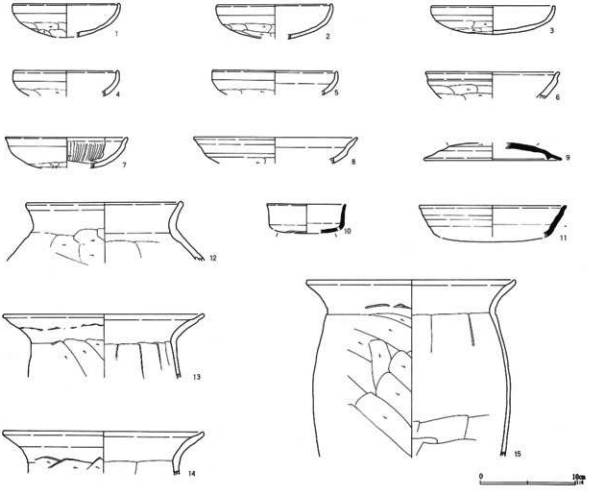
SJ66

1	暗褐色土	ローム粒子縞状に混入 ロームブロックやや少量
2	暗褐色土	ロームブロック多量
3	黒褐色土	1層類似。黒色味強い
4	灰白色粘土	
5	褐色土	ローム粒子少量
6	黒色土	ロームブロック・ローム 粒子少量
7	黒色土	焼土粒子・焼土ブロック少量
8	灰白色粘土	ロームブロック・焼土粒子少量
9	明褐色土	
10	褐色土	ロームブロック・ローム粒子 焼土粒子混入

カマド

1	褐色土	ロームブロック多量
2	暗茶褐色土	灰色粘土・茶褐色粘土混入
3	赤褐色土	焼土混入
4	黒褐色土	炭・焼土・灰多量
5	黒褐色土	ローム粒子混入
6	暗褐色土	焼土粒子混入
7	黒褐色土	茶褐色粘土混入
8	暗褐色土	ローム粒子・茶褐色粘土混入

第113図　A区第66号住居跡出土遺物



12は土師器壺、13～15は土師器甕である。甕は胴部上端をナナメに削り上げている。

須恵器は少なく24片出土した。内訳は坏が13点、蓋が８点、甕が３点である。全て末野産または、末野系（群馬産の可能性をもつもの）である。時期は熊野Ⅱ期と考えられる。

A区第70号住居跡（第114図）

A区第70号住居跡は調査区北東部の37－16･17グリッドに位置する。第50号掘立柱建物跡と重複し、本住居跡の方が古い。平面形は方形で、規模は長軸長3.90ｍ、短軸長3.60ｍ、深さ0.25ｍである。主軸方位はN－105°－Eを指す。

床面は概ね平坦で、住居中央部からカマド前面に掛けて堅く締まっていた。壁際はやや軟弱であった。

埋土は焼土粒子・ローム粒子混じりの褐色土を基調としていた。

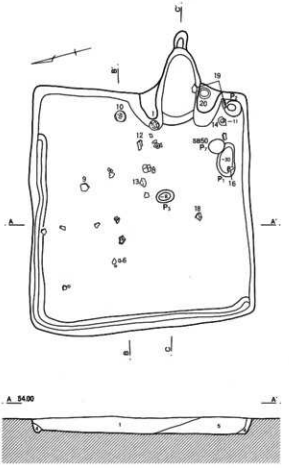
カマドは東壁に設置されていた。燃焼部は壁を切り込んでおり、一段高い煙道部に続く。埋土は第１・２・５層が天井部崩落土、３・４層が灰層である。６層は掘り方埋土。燃焼部側壁の一部は強く被熱していた。袖は白色粘土と褐色土を積み上げて構築されている。右袖内には、土師器甕が倒立状態で埋め込まれていた。袖の補強材と考えられる。

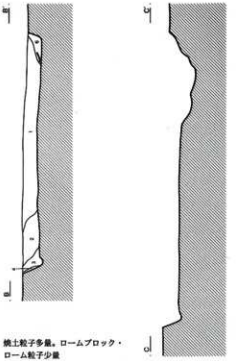
ピットは３本検出された。Pit２は位置的に貯蔵穴となる可能性はあるが、Pit１・３は遺構に伴うものではない。

壁溝は北壁から西壁にかけて巡っていた。深さ５cmほどである。

出土遺物は土師器坏・皿・暗文坏・暗文皿・甕・小型甕・甑、須恵器坏・蓋・高盤・長頸瓶、青銅製

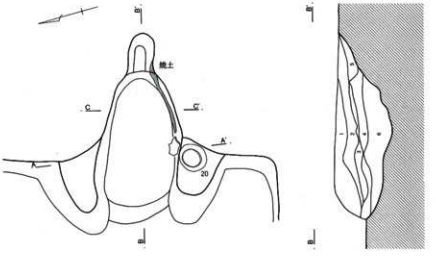
第114図　A区第70号住居跡





SJ70
1　褐色土　焼土粒子多量。ロームブロック・ローム粒子少量
2　褐色土　焼土粒子・ローム粒子多量・ロームブロック少量
3　褐色土
4　黄褐色土　ローム粒子多量
5　明褐色土　微細なローム粒子混入
6　褐色土　白色粘土少量

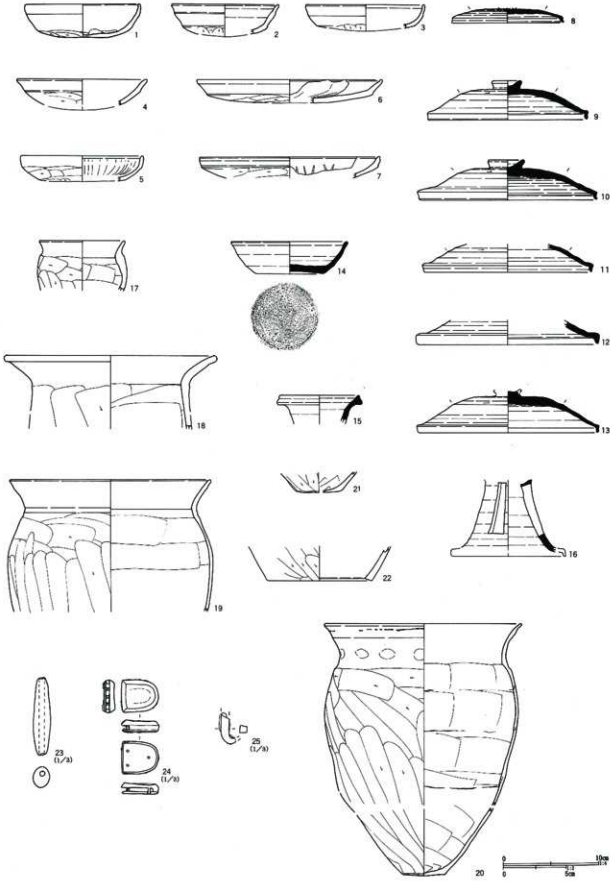
0　2m



カマド
1　明褐色土　灰白色粘土・焼土粒子混入
2　明褐色土　灰白色粘土混入。焼土粒子・粘土ブロックやや多量
3　橙色灰層
4　黒色灰層　焼土・カーボン混入
5　褐色土　ローム粒子やや多量
6　暗褐色土　ローム粒子縞状に混入
7　灰白色粘土
8　灰白色粘土　ロームブロック混入
9　褐色土　ローム粒子・焼土ブロック混入
10　明褐色土　ローム主体

0　1m

第115図　A区第70号住居跡出土遺物



第54表　A区第70号住居跡出土遺物観察表（第115図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	12.0	3.5		ABC	A	褐色	100%	№25。左袖先端下層。「十」へラ線刻
2	土師有段坏	(11.2)	3.1		AC	C	淡褐色	10%	覆土
3	土師坏	(12.4)	2.5		BC	A	暗褐色	5%	覆土
4	土師皿	(13.6)	2.8		BC	A	褐色	5%	覆土
5	土師暗文坏	(12.8)	2.6		BC	A	暗褐色	20%	覆土。内面放射暗文、外面口縁煤付着
6	土師暗文皿	(19.6)	2.4		CDG	A	橙褐色	10%	№8。覆土中層
7	土師暗文皿	(19.0)	2.2		ABC	A	褐色	5%	覆土
8	須恵蓋	(11.8)	1.5		BC片	A	灰色	25%	覆土。末野または群馬産か。内面磨滅
9	須恵蓋	16.7	4.1		BC	B	灰褐色	55%	№9。覆土下層。末野産
10	須恵蓋	18.8	4.2		B片	C	淡褐色	95%	№1。ほぼ床面。末野産
11	須恵蓋	(17.8)	2.9		B針	A	灰色	20%	覆土。南比企産。
12	須恵蓋	19.0	2.5		BCD片	D	淡褐色	10%	№23。覆土下層。末野産
13	須恵蓋	(19.0)	4.4		BC片	C	茶褐色	30%	№6。覆土中層。末野産。
14	須恵坏	(12.0)	3.4	7.0	B片	A	青灰色	60%	№2。床面。末野産。底部B0手法
15	須恵長頸瓶	8.0	3.0		BC	A	黄灰色	30%	覆土。秋間または湖西産か。内外面濃緑色の自然釉
16	須恵高盤		7.5		B片	B	灰褐色	25%	№3。覆土下層。末野産。3方透かし
17	土師小型甕	(9.0)	5.3		ABG	A	褐色	35%	覆土
18	土師甕	22.0	7.7		ACD	A	褐色	15%	№24。覆土中層
19	土師甕	(21.0)	13.9		ABC	A	褐色	20%	カマドNo2+No22
20	土師甕	20.6	(26.5)	4.6	ABCD	A	暗褐色	80%	カマド右袖内No1
21	土師甕		2.1	4.8	ABC	A	暗褐色	40%	Pit2内
22	土師甑		3.6	11.0	BCDG	A	暗褐色	10%	カマド
23	土錘	覆土。長さ6.1cm。最大径1.4cm。孔径0.4cm。重さ12.26g。胎土BCD。焼成A。褐色。残存100%							
24	青銅製帯金具	覆土。鉈尾。ほぼ完存。長さ2.9cm　幅2.5cm　厚さ0.9cm							
25	不明鉄製品	覆土。残$_{8}$長1.5cm。棒状　釘か？							

帯金具、不明鉄製品、土錘がある（第115図）。住居相互の重複はないが、7世紀後半～8世紀初頭頃の遺物が混入している（2・4・7・15・18・22）。

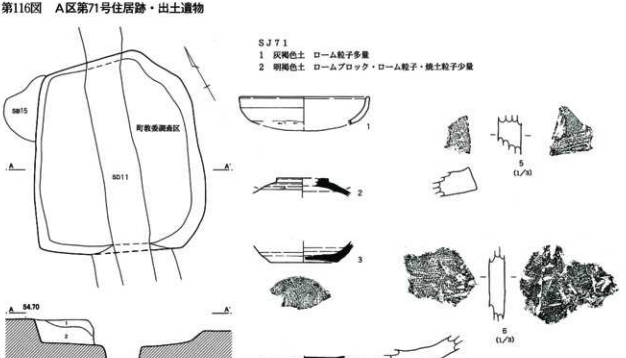
1～3は土師器坏。1はカマド左袖先端付近から出土した土師器坏。完形で深身、底部は平底風。内面に「十」状の線刻がある。6は底部平底風の皿。8～13は須恵器蓋。8は小振りで低平な蓋。つまみを接合部に刺突を加えている。内面の中心付近は磨滅しており、硯に転用された可能性がある。末野または群馬産か。遺構に伴うものではなかろう。9～13は椀蓋と考えられる。9・10・12・13は末野産で、高台椀蓋であろう。10は重量感があり堅牢なつくり。表裏両面に重ね焼きの変色帯があり、それによれば口径17cm前後、高台径9cm前後の高台椀とセットとなると考えられる。11は南比企産の蓋で、無台椀の蓋と推定される。14はカマド脇の床面から出土した須恵器坏である。底部は回転糸切り後無調整であるが、底径はまだ大きい。しっかりしたつくりで底部は厚い。末野産。15は湖西産、または秋間産のフラスコ瓶か。歪みが目立つ。16は高盤脚部片。長方形の透孔が3方に穿たれるものと推定される。19・20は武蔵型甕。いわゆる「コ」の字状口縁甕になる前段階。20はカマド右袖内に埋設されていた。胴下位から底部に掛けては直接接点はないが、胎土・色調が酷似し、同一個体の可能性がある。24は青銅製帯金具の鉈尾。長さ2.5cm、幅2.9cm。完形品で、3本の鋲で留められている。

須恵器は100片出土し、内訳は坏が48点（末野産39・南比企産9）、蓋30点（末野25・南比企4・群馬？1）、高盤1点（末野）、高台盤2点（末野）、壺瓶類2点（末野1・湖西または秋間1）、甕17点（末野）である。時期は熊野Ⅳ期～Ⅴ期であるが、主体はⅣと考えられる。

A区第71号住居跡（第116図）

A区第71号住居跡は44・45－11グリッドに位置する。住居中央部を南北に貫通する第11号溝跡に破壊

第116図　A区第71号住居跡・出土遺物



第55表　A区第71号住居跡出土遺物観察表(第116図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	(13.5)	2.9		BC	A	褐色	5%	覆土
2	須恵蓋		1.9		BC片	A	灰色	20%	覆土。末野または群馬産。円盤状つまみ
3	須恵坏		2.1	7.2	BC片	B	黄灰色	25%	覆土。末野産。底部B0手法
4	須恵皿		0.9	7.0	BC片	B	黄灰色	35%	覆土。末野産。底部B0手法
5	平瓦				BCD	B	暗灰色		覆土
6	平瓦				BCDF	B	黄灰色		覆土

され、遺構の遺存状態は悪い。また、東半は町教育委員会によって既に調査されている。西壁部に第15号掘立柱建物跡が重複し、本住居跡の方が新しいことが判明した。平面形は現状で不整長方形であるが、町教育委員会調査区部分は壁が崩落している可能性がある。規模は長軸長3.00m、短軸長2.73m、深さ0.40mである。主軸方位はN－28°－Eを指す。

床面は中心に向かってやや傾斜しており、全体に非常に堅く踏み固められていた。埋土は2層に分かれ、第1層は第11号溝跡埋土、第2層は本住居跡埋土で、ロームブロックを霜降り状に含む明褐色土で、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

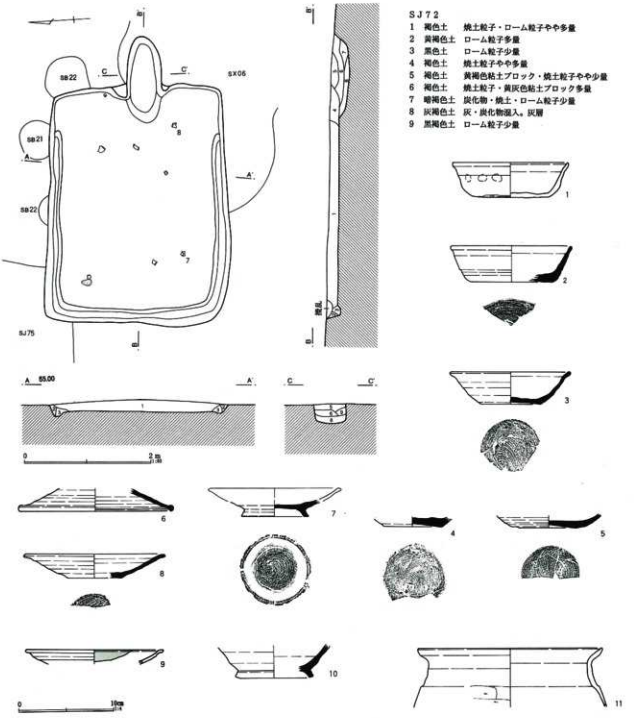
カマド・ピット等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は少なく、土師器坏、須恵器坏・皿・蓋、瓦がある（第116図）。いずれも小片で覆土中から出土したものである。2は円盤状のつまみをもつ蓋。末野産または群馬産。3・4は底部回転糸切り後無調整の坏と皿。5・6は平瓦片。5は凹面布目、凸面は平行叩き。6は凹面やや粗い布目、凸面は器面が荒れて調整不明瞭。出土遺物は8世紀前半～9世紀後半頃までのものが混在し、住居の時期は不明確である。中世の竪穴状遺構となる可能性も考慮すべきかもしれない。

A区第72号住居跡（第117図）

A区第72号住居跡は43－10・11グリッドに位置する。第75号住居跡、第6号特殊遺構、第21・22号掘

第117図　A区第72号住居跡・出土遺物


SJ72
1　褐色土　焼土粒子・ローム粒子やや多量
2　黄褐色土　ローム粒子多量
3　黒色土　ローム粒子少量
4　褐色土　焼土粒子やや多量
5　褐色土　黄褐色粘土ブロック・焼土粒子やや少量
6　褐色土　焼土粒子・黄灰色粘土ブロック多量
7　暗褐色土　炭化物・焼土・ローム粒子少量
8　灰褐色土　灰・炭化物混入。灰層
9　黒褐色土　ローム粒子少量
SB22
SX06
SB21
SB22
SJ75
A
A'
C
C'
B
B'
SB.
SX.
SB.
SX.
SB.
SX.

第56表　A区第72号住居跡出土遺物観察表（第117図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	(12.1)	3.7	7.9	ABC	A	茶褐色	55%	確認面
2	須恵坏	(12.6)	3.8	(8.6)	BCF	A	灰色	15%	覆土。秋間産。底部B0手法
3	須恵坏	12.7	3.4	6.4	BC片	A	黄灰色	45%	カマド上面他。末野産。底部B0手法
4	須恵坏		1.0	6.0	AB片	A	茶褐色	70%	確認面。末野産。底部B0手法
5	須恵皿		1.4	6.1	BC片	A	灰色	45%	カマド。末野産。底部B0手法
6	須恵蓋	(16.0)	2.4		BC片	A	灰色	5%	覆土。末野産
7	須恵高台皿		1.7	7.0	CE片	A	灰色	75%	№7。末野産。高台貼り付け
8	須恵皿	(14.5)	2.5	(6.0)	BC片	B	黄灰色	20%	№1(床面)＋カマド内。末野産。底部B0手法
9	灰釉皿	(14.3)	1.5		B	A	明灰色	10%	覆土。二川産か。内面のみ施釉(刷毛塗り)
10	須恵高台椀		3.5	(7.4)	AB	B	褐色	10%	確認面。末野産
11	土師甕	(19.4)	6.2		ABCG	A	淡褐色	15%	カマド内

ピットは検出されなかった。壁溝は東壁側を除き巡っていた。深さは約5～10cm。

出土遺物は土師器坏・甕、須恵器坏・Ⅲ・高台Ⅲ・蓋、灰釉陶器Ⅲがある（第117図）。1は確認面から出土した土師器坏。底部は軽いヘラケズリで、ヘラが届いていない部分や粘土の亀裂がある。2は須恵器坏。胎土は精良で焼きも良い。厚い底部から口縁部に掛けて先細りする。底部は糸切り後無調整である。秋間産か。3・4は末野産の坏。5・8はⅢ、7は高台Ⅲである。9は灰釉陶器Ⅲ。内面のみ施釉（刷毛塗り）、体部は回転ヘラケズリされる。K-90号窯式に比定される。二川産の可能性がある。11は「コ」の字状口縁甕である。

須恵器は164片出土し、内訳は坏が98点（末野産91・南比企産6・群馬産1）、高台椀4点（末野）、Ⅲ8点（末野）、高台Ⅲ1点（末野）、蓋22点（末野20・南比企2）、高台坏1点（湖西）、稜椀2点（南比企）、壺瓶類3点（末野）、甕25点（末野24・南比企1）である。データは混入品を含む数字で、例えば稜椀と高台坏は明らかな混入品である。時期は熊野Ⅵ期と考えられる。

A区第73号住居跡（第118図）

A区第73号住居跡は調査区北部の37－15・16グリッドに位置する。第3号掘立柱建物跡と重複し、平面及び断面観察によって本住居跡の方が新しいことが判明した。平面形は横長の長方形で、規模は長軸長5.00m、短軸長4.08m、深さ0.54mである。主軸方位はN－30°－Eを指す。

床面は平坦で堅く踏み固められていた。埋土はローム粒子・ロームブロックを多量に含む暗褐色～黒褐色土を基調としており（第1～3層）、人為的に埋め戻された可能性がある。

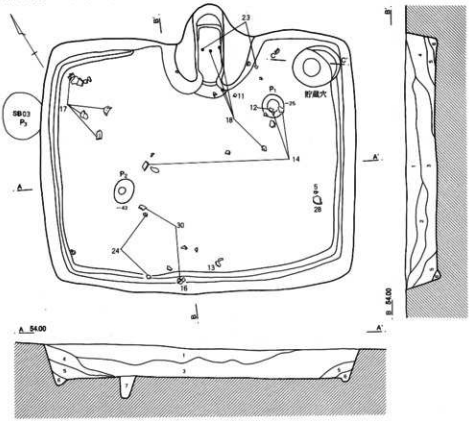
カマドは北東壁の中央部に設けられている。燃焼部の大半は壁内に納まり、煙道との移行部は壁を切り込んでいた。埋土は第1～4・6層が天井部崩落土、第5層が灰層、第10層が掘り方埋土である。袖は灰白色粘土と灰褐色土を積んで構築される。左右両袖内には土師器甑と甕が倒立状態で埋設されていた。また、燃焼部灰層上面には、土師器甕が3個体、連結した状態で潰れていた。天井部の架構材に使用したものと考えられる。

ピットは2本検出されたのみで、4本主柱穴にはならない。貯蔵穴はカマド右脇の東コーナー部に位置する。長径75cmの楕円形で、深さは53cm。壁溝はカマドの周囲を除き全周する。深さは5～10cm。

出土遺物はカマドとその周囲から多量に検出されている。器種としては、土師器坏・暗文坏・Ⅲ・甕・小型甕・甑・壺、須恵器坏・蓋・磨鉢・壺・甕がある（第119～121図）。

1～4は土師器坏。いずれも丸底形態となる。4はカマド右袖内底面近くに置かれていた。5は暗文坏。丸底で内面に放射暗文が施されている。6はⅢ7～9は須恵器蓋。いずれも小片である。7は坏G蓋と思われる。8は無かえり、9はかえり蓋。10・

第118図　A区第73号住居跡



SJ73

1　暗褐色土
　ローム粒子多量

2　暗褐色土
　ロームブロック多量

3　黒褐色土
　ローム粒子・ロームブロック多量・
　焼土粒子混入

4　暗褐色土
　ローム粒子多量

5　褐色土
　ロームブロック少量。ローム粒子
　多量

6　暗褐色土
　ローム粒子少量

7　黒褐色土
　ローム粒子多量

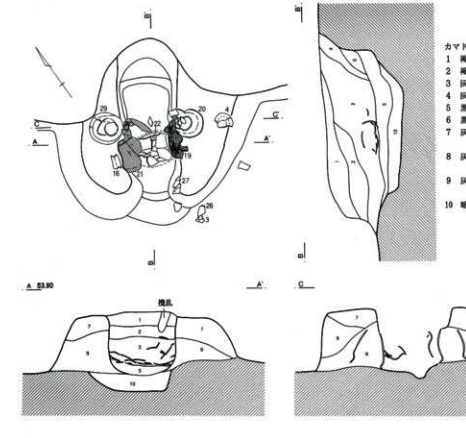
貯蔵穴

1　暗褐色土
　ロームブロック多量

2　暗茶褐色土
　ロームブロック・粘土多量

3　褐色土
　ロームブロック多量

0　2m



カマド

1　褐色土　　灰白色粘土・焼土

2　褐色土　　粘土多量

3　灰白色粘土

4　灰白色粘土　焼土ブロック多量

5　黒灰色土　焼土・炭化物・灰混入

6　黒灰色土　焼土ブロック多量

7　灰褐色土　灰白色粘土・焼土粒子・
　粘質土ブロック混入

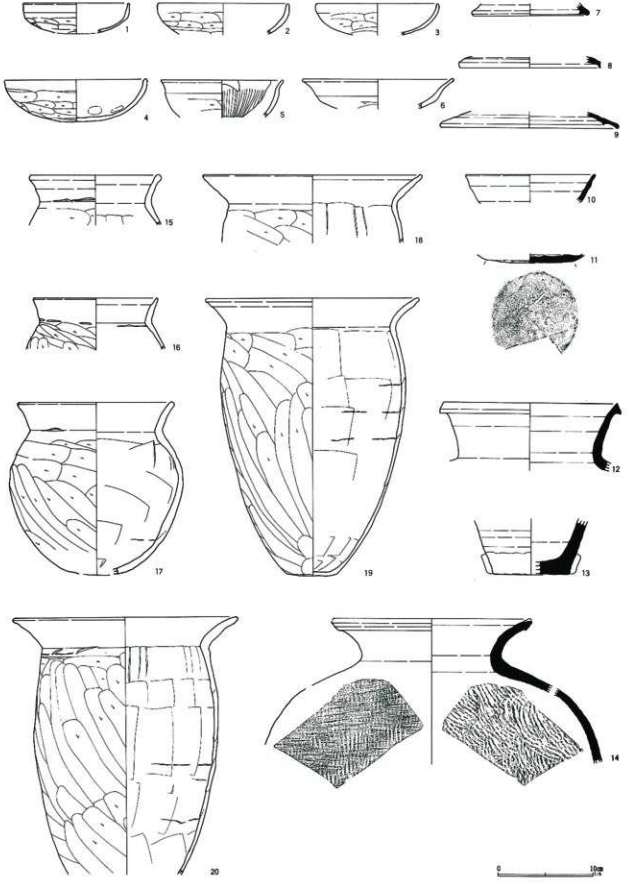
8　灰褐色土　灰白色粘土・焼土粒子・
　粘質土・焼土ブロック混入

9　灰白色土　灰白色粘土・ローム粒子少量
　焼土粒子混入

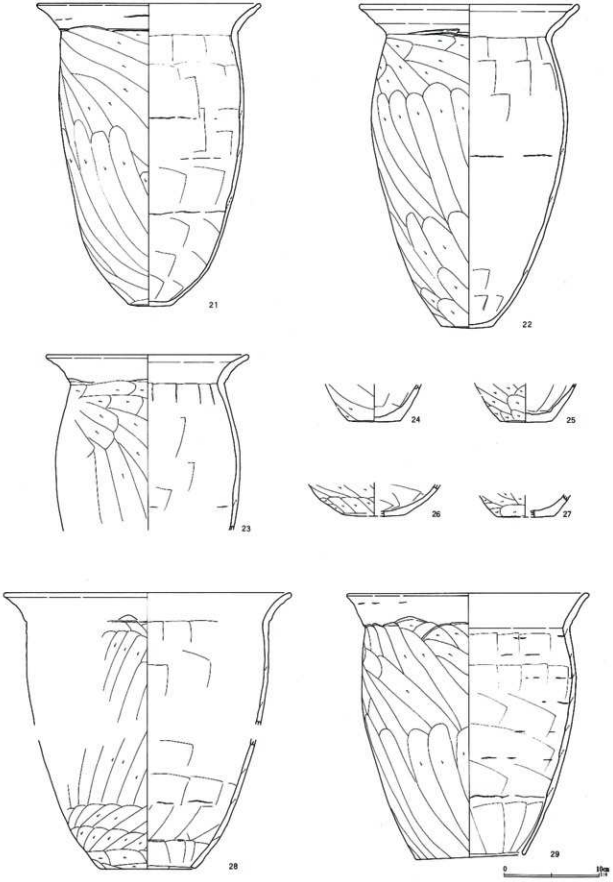
10　暗褐色土　灰白色粘土・焼土粒子
　ロームブロック多量

0　1m

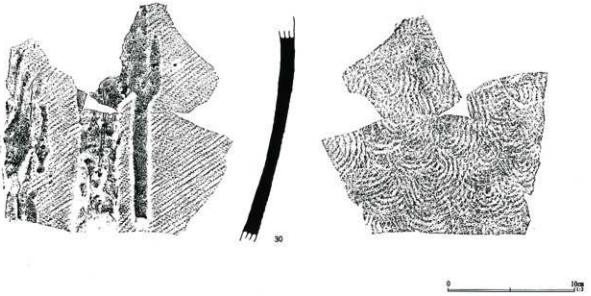
第119図　A区第73号住居跡出土遺物(1)



第120図　A区第73号住居跡出土遺物(2)



第121図　A区第73号住居跡出土遺物(3)



第57表　A区第73号住居跡出土遺物観察表（第119～121図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	(11.0)	3.1		A B	A	橙褐色	25%	覆土。粉っぽい胎土
2	土師坏	(13.6)	3.2		A B	B	橙褐色	20%	覆土
3	土師坏	(12.8)	3.3		A B	A	淡褐色	20%	カマドNo.12。カマド前面床面
4	土師坏	14.9	4.4		A B	B	橙褐色	55%	カマド内No.3。右袖内
5	土師暗文坏	(12.8)	3.9		A B	A	明褐色	10%	No.36。床面。内面放射暗文
6	土師皿	(15.8)	3.1		A B	B	灰褐色	10%	覆土
7	須恵蓋	(12.0)	1.3		B C	A	灰色	5%	カマド内。末野産か
8	須恵蓋	15.0	1.2		B片	A	暗灰色	10%	覆土。末野産
9	須恵蓋	(18.6)	1.7		A B片	C	灰褐色	10%	覆土。末野産
10	須恵坏	(13.5)	3.0		B片	A	青灰色	10%	覆土。末野産
11	須恵坏		1.0	9.2	B片	B	淡灰色	75%	覆土。末野産
12	須恵壺	(18.4)	7.1		B C片	B	灰白色	10%	No.28。覆土中層。末野産
13	須恵擂鉢		5.9	(8.2)	B片	A	灰色	40%	No.38。床面。末野産
14	須恵壺	(20.8)	15.2		B C	A	灰色	5%	No.10・29・30。覆土中～上層。産地不明
15	土師小型壺	(13.4)	5.3		A B	B	褐色	20%	覆土
16	土師小型壺	(13.0)	5.4		A B	B	褐色	25%	カマド内No.4。左袖内
17	土師小型壺	(16.2)	18.0	7.6	A B	B	暗褐色	30%	No.13・14・15・16。床～覆土中層
18	土師甕	23.0	7.2		A B	B	褐色	65%	カマド内No.1・4十No.35。カマド内十覆土中層
19	土師甕	22.3	29.0	5.3	A B	B	褐色	90%	カマド内No.8・9・14。天井部架構材
20	土師甕	23.4	27.0		A B	B	明褐色	95%	袖内No.2。カマド右袖内
21	土師甕	23.4	31.7	4.5	A B	B	明褐色	85%	カマド内No.5・6。天井部架構材
22	土師甕	22.8	34.0	5.4	A B	B	明褐色	85%	カマド内No.7・8・9。天井部架構材
23	土師甕	(21.2)	18.5		A B	B	褐色	45%	カマド内No.6・25
24	土師甕		3.9	5.5	A B	B	褐色	55%	No.2・9。ほぼ床面
25	土師甕		4.1	5.4	A B	B	褐色	95%	カマド袖内No.5
26	土師壺		3.3	(7.0)	A B	B	褐色	25%	カマド内No.13
27	土師甕		2.3	(6.0)	A B	B	褐色	40%	カマド内No.2
28	土師甑	(30.0)	(29.0)	(10.0)	A	B	褐色	10%	No.37。床面
29	土師甑	25.3	27.9	11.4	B	B	明褐色	95%	カマド内No.1
30	須恵甕				B C	A	濃灰色		No.4・8。覆土中～上層。産地不明。窯壁付着

11は須恵器坏。11は底部手持ちヘラケズリ調整である。12・14は須恵器壺。14は外面平行叩き（擬格子）、内面は同心円当て具痕が残るが、同心円に直交する突線が付く。当て具の傷か。産地は不明ながら、南比企の可能性がある。13は磨鉢。体部下端の凸帯が剥落している。15～17は小型甕（壺）。18～25・27は土師器甕である。口縁部はくの字に折れる長胴甕である。器壁は薄く、武蔵型甕に連なるタイプである。20はカマド右袖の芯に使用されたもの、19・22・21はこの順に重ねてカマド天井部の架構材に用いられたものと考えられる。28・29は土師器甑。29はカマド左袖の芯に使用された。30は須恵器大甕胴部片。外面平行叩き（擬斜格子）、内面同心円当て具痕が残る。外面には窯壁が厚く垂下している。胎土はやや粗く末野産か。

須恵器は38片出土し、内訳は坏が12点（末野）、椀1点（末野）、蓋8点（末野）、長頸瓶1点（末野）、磨鉢1点（末野）、壺2点（末野）、甕13点（不明）である。時期は熊野Ⅱ期と考えられる。

A区第74号住居跡（第122図）

A区第74号住居跡は調査区北端の35－13・14、36－14グリッドに位置する。平面形は不整形で、当初住居相互、または住居と土壙の重複と考えたが、調査の結果、住居最終堆積以前の段階で東半の床面を抜き、更に東壁を拡張して土壙を掘削したものと考えられた。いずれにせよ通常の住居跡とは様相を異にする。規模は長軸長4.65m、短軸長3.00m、深さ0.90mである。主軸方位は北西壁を基準にするN－38°－Eを指す。

床面は住居西半は平坦で堅く締まっていた。東半は土壙状に一段掘り窪められており（SK1）、床そのものが削平されていた。埋土は第1～3層は自然堆積と見ることもできるが、第5層にはロームブロックが霜降り状に含まれ、人為的な堆積土と考えられる。

カマドは北東壁に設けられている。底面は鍋底状に掘り込まれ、先端は段をもって煙道部に続く。埋土は第3層～7層が天井部崩落土である。第7層下面に薄く灰層が形成され、底面が火床面に相当する。燃焼部から煙道部の側壁は強く被熱していた。袖は褐色系の粘質土を主体に構築されていたが、遺存状態はあまり良くない。カマド右脇壁外にはテラス状の掘り込みが存在している。埋土の状態から遺構に伴う可能性が高く、棚状施設または、SK1と共に住居廃絶段階で、掘られたものと推定される。

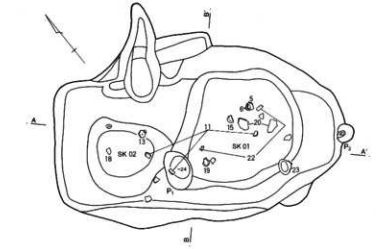
ピットは2本検出された。Pit1は住居埋没以前に掘られたものである。Pit2は遺構に伴うものではない。

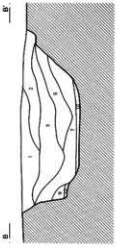
土壙は2基あり、第1号土壙（SK1）は住居東半の床面を削平して掘り込まれていた。不整円形で、直径1.90m、床面からの深さは15～20cmである。第1号土壙の東側の張出部もおそらく同時に掘られた可能性がある。掘削時期は、いずれも埋土の状態から住居廃絶後一定期間を経た後のことと推定される。第2号土壙（SK2）は西半の床面下に検出されたもので床下土壙と考えられる。

第1号土壙およびその東側の張出部は土取り、または粘土採掘を目的としたものであろうか。掘削労力削減のために廃絶住居を利用した可能性があろう。

出土遺物は土師器坏・暗文坏・皿・有孔土器・甕・壺、須恵器坏・蓋・円面硯・磨鉢・盤・甕がある（第123・124図）。1～8は土師器坏。1は有段口縁坏の退化形態と思われる。2～8は丸底形態の北武蔵型坏。6は口縁部が開き気味で、扁平化したタイプでやや新しい様相が認められる。9は暗文坏系土器。器形は暗文坏であるが、内面の暗文は施されない。10・11は暗文坏。10は内面に斜格子暗文、11は放射暗文が施される。12は皿である。13は高台坏状の器形で、坏部底面中央に直径1.6cmの小孔が焼成前に穿たれている。坏部外面はヘラケズリ、高台部はヨコナデ＋ヘラナデ調整である。類例はなく用途不明である。14は須恵器蓋。15はSK1の底面から検出された須恵器坏。底部は平底で、全面回転ヘラケズリ調整される。口径12.7cmで、南比企産。他の土器群

第122図　A区第74号住居跡

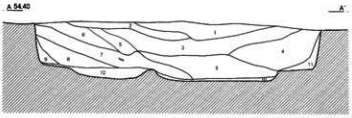


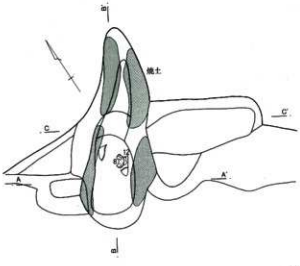


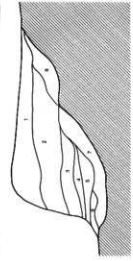
SJ74

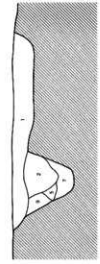
1　暗褐色土　ローム粒子少量
2　褐色土　ローム粒子少量
3　黒褐色土　ロームブロック少量。ローム粒子多量
4　暗褐色土　ローム粒子多量。ロームブロック少量
5　褐色土　ロームブロック・粘質土ブロック多量
6　暗褐色土　ローム粒子多量・ロームブロック多量
7　黒褐色土　ロームブロック・炭化物粒子多量
　　焼土粒子少量
8　暗褐色土　ロームブロック少量
9　黒褐色土　ロームブロック少量
10　茶褐色土　粘質土・ロームブロック混入
11　暗褐色土　ローム粒子多量

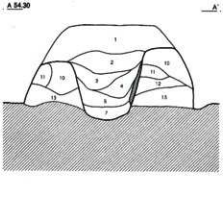
0　1m









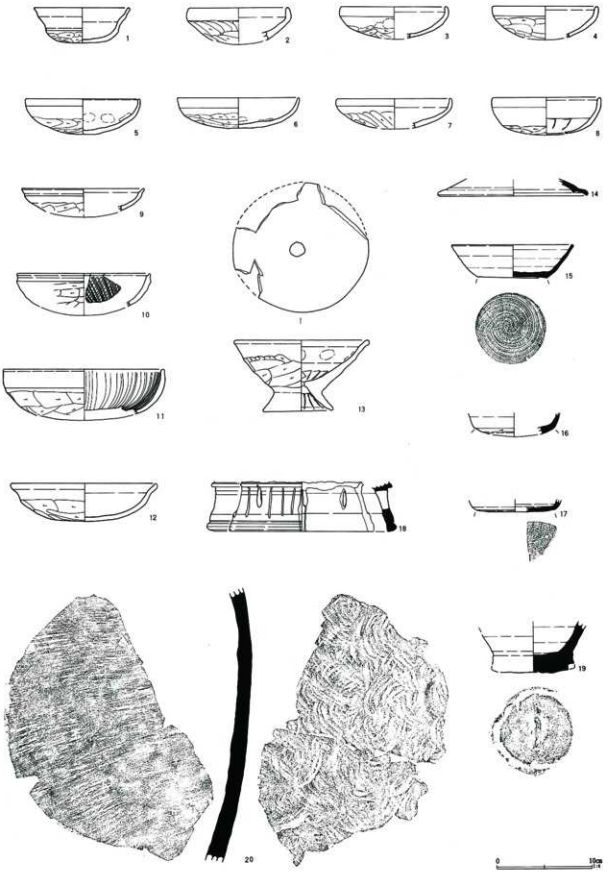


カマド

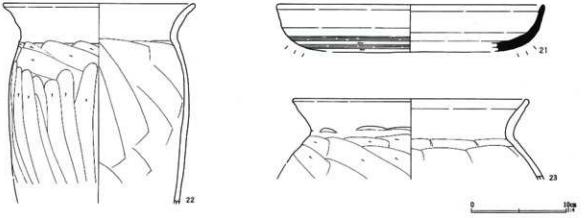
1　褐色土　ローム粒子少量
2　暗褐色土　ロームブロック多量
3　暗褐色土　粘質土ブロック混入
4　褐色土　粘質土ブロック混入
5　黒褐色土　被熱したロームブロック・焼土粒子混入
6　茶褐色土　粘質土・ロームブロック混入
7　暗赤褐色土　焼土粒子・焼土ブロック多量。炭化物・灰混入
8　赤褐色土　焼土粒子混入
9　褐色土　被熱ロームブロック・焼土ブロック混入
10　粘質土　ローム粒子混入
11　黒褐色土　ローム粒子・ロームブロック混入
12　暗褐色土　粘質土ブロック混入
13　暗褐色土　ロームブロック混入

0　1m

第123図　A区第74号住居跡出土遺物(1)



第124図　A区第74号住居跡出土遺物(2)



第58表　A区第74号住居跡出土遺物観察表（第123･124図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	10.0	3.7		AB	B	褐色	25%	覆土
2	土師坏	(10.4)	3.4		BC	A	暗褐色	10%	覆土
3	土師坏	(11.0)	3.3		BC	B	褐色	30%	カマド
4	土師坏	(11.0)	3.3		ABCD	A	褐色	25%	床下
5	土師坏	12.0	3.7		AB	B	褐色	75%	№2。覆土中層
6	土師坏	12.8	3.2		AB	B	橙褐色	45%	№2。覆土中層
7	土師坏	(12.0)	3.1		BC	B	淡褐色	30%	覆土
8	土師坏	(11.2)	3.8		AB	B	褐色	40%	カマド内№2
9	土師坏	(13.0)	3.4		BCD	A	褐色	5%	覆土
10	土師暗文坏	14.0	3.5		BC	A	明褐色	10%	覆土。内面斜格子暗文
11	土師暗文坏	16.8	4.8		AB	B	橙褐色	40%	№6･8・13。床面十覆土中層。内面放射暗文
12	土師皿	15.4	3.9		AB	B	黄褐色	55%	カマド№3･4
13	土師有孔土器	13.9	7.5	7.2	AB	B	黄褐色	75%	№17。覆土下層。底部中央に径1.6cmの小孔あり
14	須恵蓋	15.6	1.8		CD片	D	淡褐色	5%	覆土。未野産。
15	須恵坏	12.7	3.5	7.3	B鉢	A	淡青灰色	95%	№14。南比企産。底部3ｍ手法
16	須恵坏		2.3	8.4	BC	B	明灰色	5%	床下北東。未野産か。底部3ｍ手法
17	須恵坏		1.3	8.3	C片	A	灰色	5%	覆土。未野産。底部3ｍ手法
18	須恵円面硯		5.2	18.4	BC	A	暗灰色	10%	№9。覆土下層。未野産か。楕円形透かし十刻み
19	須恵磨鉢		5.3	(8.8)	B片	B	灰色	65%	№15。底面。未野産。底部ヘラ切り後ﾅﾃﾞ
20	須恵甕				BC片	B	灰褐色		№1･3。覆土上層。未野産
21	須恵盤	28.2	5.0		BC片	B	灰白色	5%	覆土。未野産。底部カキ目後回転ヘラケズリ
22	土師甕	(20.0)	21.0		AB	B	灰褐色	25%	№4･10。覆土下層
23	土師壺	24.6	8.5		AB	B	明褐色	80%	№11。覆土下層

と比較しても最も新しい様相が留められ、ＳＫ１の掘削時期を示すものと推定される。16・17は小振りの坏。底部は回転ヘラケズリ。18は須恵器円面硯脚部片。低脚で、楕円形透かしの間に３本の刻み（貫通しない）が入る。焼きは良く、末野産か。19は磨鉢。底部の側面に粘土帯を貼付しているが雑なつくりである。内面は使用により磨滅している。20は須恵器大甕胴部片。外面は平行叩き後、カキ目とハケメ調整、内面は同心円当て具。21は須恵器盤。体部下端以下回転ヘラケズリ。末野産。22は土師器甕。口縁部の屈曲が弱く、器壁も厚い長胴甕である。23は土師器壺。

須恵器は33片出土し、内訳は坏が13点（末野産５・南比企産６・湖西産１・不明１）、蓋１点（末野）、盤３点（末野）、鉢２点（末野）、磨鉢１点（末野）、円面硯１点（末野か）、甕12点（末野）となる。住居の時期は熊野Ⅱ期と考えられ、その後、熊野Ⅳ期に至り第１号土壙が再掘削されたものと考えられる。

A区第75号住居跡（第125図）

A区第75号住居跡は43・44－10グリッドに位置する。第72号住居跡・第131号土壙に南壁部を一部削平されるが、遺構の遺存状態は比較的良好である。また、第35号掘立柱建物跡と重複し、第35号掘立柱建物跡Pit３・Pit４は床面で検出されており、本住居跡の方が新しいものと判断した。Pit１は建物跡柱穴となる可能性も残されている。

平面形は縦長の長方形で、規模は長軸長5.82m、短軸長4.02m、深さ0.30mである。主軸方位はN－10°－Eを指す。

床面はほぼ平坦で全体的に堅く締まっていた。埋土は上層（第１層）にロームブロックを多量に含む暗褐色土が堆積しており、人為的に埋め戻された可能性がある。第２・３層には焼土粒子と炭化物粒子の混入量が非常に多い。

カマドは北壁に設置される。燃焼部は壁を切って掘り込まれ、底面は鍋底状に窪む。側壁は上部が弱く被熱していた。埋土は第１・２層が白色粘土を主体とする天井部崩落土、第３層が灰層である。袖は白色粘土を積み上げて構築されていた。左袖には土師器甕を倒立状態で埋設し、袖の芯に使用していた。

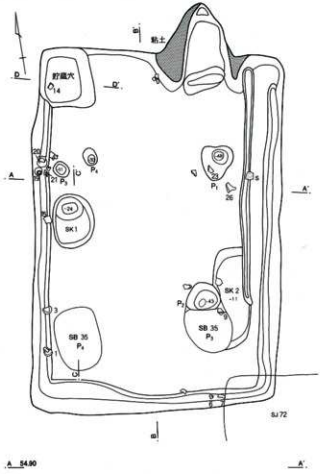
ピットは４本検出された。おそらく４本主柱穴と考えられるが、南西部の柱穴は検出できなかった。Pit１は第35号掘立柱建物跡の柱穴としても良いが、柱筋からやや外にはずれる。Pit２は第35号掘立柱建物跡Pit３と重複するが、新旧関係は明確に把握できなかった。

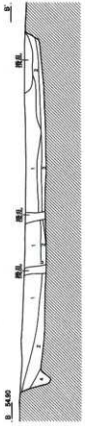
貯蔵穴は北西コーナー部に設置されていた。不整方形で、長軸長96cm、短軸長90cm、床面からの深さ20cmである。また、西壁際に土壙が１基検出されている（ＳＫ１）。上面に床面は検出されず、住居よりも新しい可能性がある。２号土壙は東壁際にある。埋土の状況から掘り方の一部となる可能性が高い

第59表　A区第75号住居跡出土遺物観察表（第126・127図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	12.8	3.6		ABC	A	茶褐色	95%	№7。覆土下層
2	土師坏	(14.9)	3.4		A	A	褐色	30%	覆土
3	土師坏	12.8	4.0		AC	B	茶褐色	85%	№8。覆土下層
4	須恵坏	(15.0)	3.4		B片	A	褐色	30%	覆土。来野産。底部回転ヘラケズリ
5	須恵坏	(13.6)	3.4	(8.2)	C片	A	暗青灰色	45%	覆土。来野産。底部B3b手法
6	須恵坏	(13.5)	4.0	8.7	針	A	灰色	50%	№2。覆土中層。南比企産。火襷痕。底部B3a手法
7	須恵坏		2.9	(9.5)	B片	A	灰黒色	45%	№1。覆土上層。来野産。底部３e手法
8	土師皿	(15.2)	1.9		BDG	A	褐色	10%	覆土。器肉は還元している
9	須恵高台盤	(21.0)	3.0	12.8	BC片	B	淡灰色	35%	№5 覆土上層。来野産
10	須恵蓋		1.6		B片	B	灰色	65%	覆土。来野産
11	須恵蓋		2.1		B片	B	灰色	35%	覆土。来野産
12	須恵蓋	(12.0)	2.6		B片	B	青灰色	15%	覆土。来野産。つまみ接合部切り込みあり
13	須恵蓋	(14.4)	2.4		B片	B	灰色	10%	覆土。来野産
14	須恵蓋	(13.1)	3.2		B片	B	灰黒色	25%	№11。ほぼ床面。来野産
15	須恵蓋	(16.8)	2.9		BD片	B	茶褐色	30%	№10。下層。来野産
16	須恵蓋	(18.8)	1.5		BC針	B	淡灰色	5%	覆土。南比企産
17	須恵磨鉢	(16.0)	4.8		B片	A	灰色	10%	覆土。来野産
18	須恵椀？	(17.0)	4.1		BC片	A	灰色	15%	覆土。来野産
19	土師小型台付甕	9.3	10.4		AC	A	褐色	95%	№13。覆土中層
20	土師台付甕	13.3	16.4		AC	B	淡褐色	85%	№14。覆土下層
21	土師甕	(20.0)	6.7		AC	A	褐色	40%	№20 。床面
22	土師甕	(20.2)	7.5		ABC	A	褐色	20%	カマド内№1
23	土師壺	(23.6)	7.3		ABC	A	赤褐色	15%	№1。覆土上層
24	土師甕	22.0	18.7		AB	A	褐色	75%	カマド内№2。左袖内
25	土師甕		3.8	(5.5)	AB	B	茶褐色	40%	覆土
26	須恵甕				C片	B	淡灰色	15%	№2。覆土下層。来野産

第125図　A区第75号住居跡



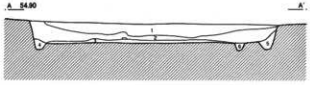


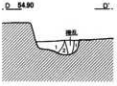
S J 7 5

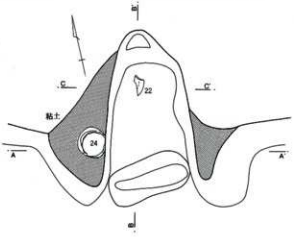
1	暗褐色土	ローム粒子・ブロック多量
2	黒褐色土	焼土粒子・ローム粒子・炭化物多量
3	暗褐色土	焼土粒子・炭化物多量・灰色粘土少量
4	黒褐色土	ローム粒子微量
5	暗褐色土	ローム粒子多量
6	暗褐色土	ローム粒子
7	黄灰色粘土	ロームブロック・焼土粒子・炭化物混入
8	暗褐色土	黄灰色粘土少量。焼土粒子

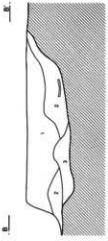
貯蔵穴

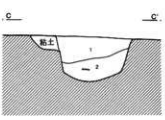
1	暗褐色土	ロームブロック多量
2	暗褐色土	灰色粘土・焼土粒子・ローム粒子少量





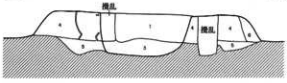




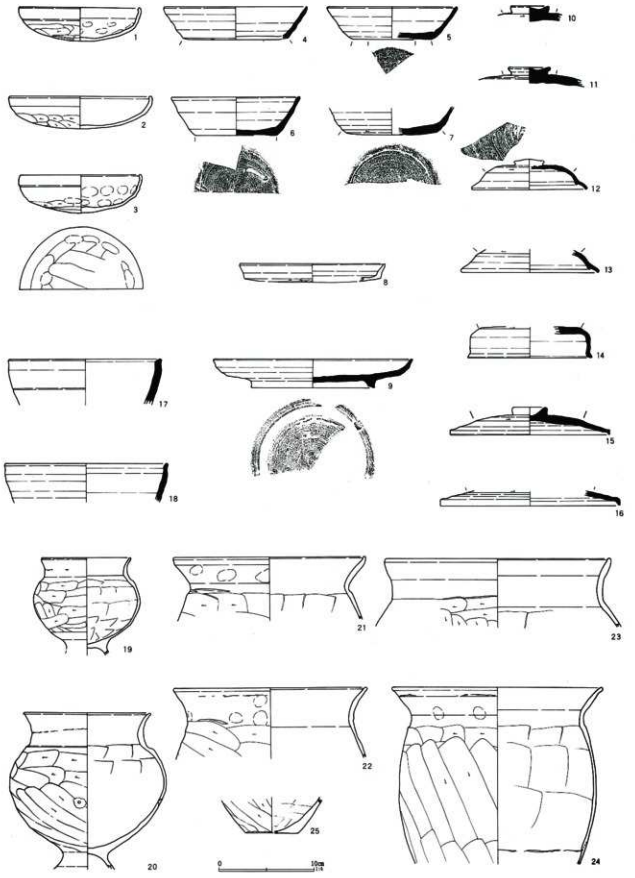


カマド

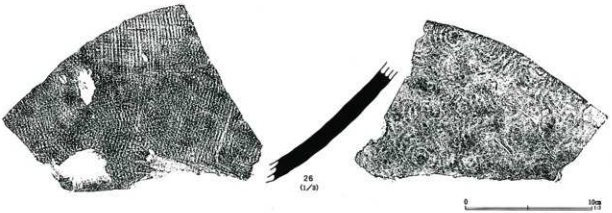
1	灰白色粘土	焼土ブロック
2	灰白色粘土	焼土ブロック多量。ロームブロック少量
3	黒灰色土	灰・炭化物・焼土粒子多量
4	灰白色粘土	焼土・ロームブロック微量
5	灰白色粘土	焼土粒子・灰多量
6	暗褐色土	



第126図　A区第75号住居跡出土遺物(1)



第127図　A区第75号住居跡出土遺物(2)



（ＳＫ２）。

壁溝は北壁を除き全周する。深さ10～15cmほどである。東壁部では内側に１条の壁溝が検出された。上面に貼床されており、一度拡張されたものと考えられる。

出土遺物は土師器坏・Ⅲ・壺・甕・台付甕、須恵器坏・高台盤・椀（鉢？）、蓋・甕がある（第126・127図）。１～３は土師器坏。弱い丸底形態である。４～７は須恵器坏。４は推定口径15.0cmと大振り。５は扁平な平底坏である。６は南比企産の坏。７は丸底風の坏で体部下端以下は回転ヘラケズリ調整される。８は土師器Ⅲで、表面は褐色だが、器肉部は還元している。混入か。９は高台盤。底部は回転ヘラケズリ。10～16は須恵器蓋。12・13は中・小型のかえり蓋。14は壺蓋と考えられる。15・16は無かえり蓋で、器形の判明する15は扁平で、小型のリング状つまみが付く。17は厚手で、口唇部は内傾する面をもつ。磨鉢か。18は椀または鉢と思われる。

19・20は土師器小型台付甕。西壁際から２個まとまって出土した。20は胴部に内面から外に向かって穿たれた小孔がある。21・22・24・25は土師器甕。24は長胴気味の器形で、胴部上端はヨコケズリ、以下はナナメケズリが施される。カマド左袖内出土。

須恵器は194片出土し、内訳は坏が121点（末野産97・南比企産19・東海産？１・不明４）、椀が２点（末野）、高台坏３点（末野）、蓋28点（末野24・南比企３・不明１）、壺蓋２点（末野）、高台盤６点（末野）、壺瓶類１点（湖西）、磨鉢２点（末野）、甕29点（末野）である。時期は熊野Ⅱ期の土器（12・13）を含むが、主体はⅢ期にあると見て良かろう。

A区第77号住居跡（第128図）

A区第77号住居跡は43－11グリッドに位置する。トレンチャーの攪乱を受け遺存状態はあまり良くない。第20・21号掘立柱建物跡と重複し、本住居跡の方が古い。平面形は方形で、規模は長軸長3.30ｍ、短軸長2.94ｍ、深さ0.27ｍである。主軸方位はＮ－13°－Ｅを指す。

床面は中央部がやや凹み、カマド前面から中央部にかけて堅く踏み固められていた。埋土は、ローム混じりの黒褐色土を基調としており、埋め戻された可能性もある。

カマドは北壁に設置される。燃焼部は壁を切り込んで掘られている。底面はほぼ平坦で床面との段差はない。埋土は第１～３層が天井部崩落土、第４層が灰層と考えられる。袖はローム混じりの茶褐色土を積んで構築されていたが、遺存状態はあまり良くない。

ピットは２本検出されたが、いずれも住居に伴うものではない。土壙は住居中央部に１基掘り込まれていた（ＳＫ１）。不整円形で、長径0.96ｍ、深さ0.60ｍ。上面に床面が乗っていることから床下土壙と考えられる。この床下土壙のために住居中央付近の床